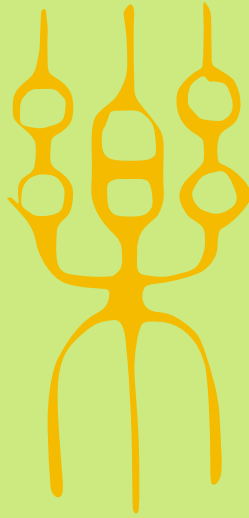
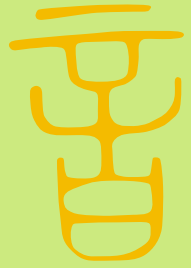


京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報

第6号 2005年3月

ISSN 1346-4590



Newsletter
of the
Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts

No.6 March 2005

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報

第6号 2005年3月

ISSN 1346-4590

目 次

所長対談 中西進先生にきく 万葉、そして日本伝統文化	3
エッセイ	
山・鉾・屋台の祭りの囃子をめぐる新しい動き	田井 竜一 26
センターニュース	29
プロジェクト研究・共同研究の報告	35
特別研究員・委託研究の研究報告	41
専任研究員の活動報告	44
日本伝統音楽研究センター 概要 2004	55
Guide to the Research Centre for Japanese Traditional Music, 2004	57
編集後記	61

Newsletter

of the

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts

No.6 March 2005 ISSN 1346-4590

所長対談

中西進先生にきく
万葉、そして日本伝統文化

日時：2005年1月19日（水曜日）

場所：10:00～12:00

京都市立芸術大学 学長室

聞き手：吉川 周平

（日本伝統音楽研究センター所長）

吉川 お忙しいなか、お話を伺う機会を与えてくださり、まことにありがとうございます。中西進先生は、平成15年4月から京都市立芸術大学学長になられ、11月には文化功労者になられました。日本伝統音楽研究センターは平成12年4月に開所して4年たったところですが、廣瀬量平所長が昨年4月に退任され、力不足ですが私が後を引き継がせていただきました。

『所報』での対談は、廣瀬先生の強い希望でなさっていたことでした。国立民族学博物館では、梅棹忠夫先生が平成5年3月に館長を退かれた時、『月刊みんぱく』の創刊以来182回続いた「館長対談」はなくなりました。それで私では無理だからやめようと思ったんですが、続けよということなのです。そういう次第ですが、先生のご研究の方法につきまして、センターが扱っているものと共通点が少しあるように思いますので、今日はいろいろと教えていただきたいと思います。

中西先生と『万葉集』
比較文学への視座

吉川 中西先生は1929年、東京のお生ま

れで、東京大学の大学院を修了され、成城大学の専任講師時代に学位をお取りになったわけですが、まずどのようにして学位論文のテーマを選ばれたのか、お伺いしたいと思います。

中西 卒業論文は『万葉集』と限らず「古代文学における叙事性の研究」という、割合広がったんですけど、「これは中国の文献との関係を調べないといけないな」ということを最後に非常に強く感じたんですね。やってみますと絶対に必要なことだと思いました。

と言いますのはね、だんだん調べてみますと、中国文学との関係はすでに17世紀に契沖がやっているんですね。膨大な『万葉代匠記』を書いて、その主たる業績は彼の博覧強記によるさまざまな中国文献や仏典、そういうものの紹介だったんです。それに対して、傍ら、比較文学と今いわれているものと比べますと、かなり違うんですね。契沖のは関連があると思われる中国の文献をただ紹介するというだけなんです。

ところが我々の研究を始めた時代の比較文学の先駆者は、パウル・ヴァン・ティエグムという人でした。彼が言っているのは、発信者と受信者とい

う考え方で、今でいうとメールの交換から郵便の伝達のようなものを譬えとして、発信者、受信者、郵便配達夫にあたるような伝達者という考え方です。そういうものだったんですね。そこには明らかに動態としての比較文学というものがある。

これは契沖にはまったくないものなんですね。契沖は単純に出典を挙げるだけですから、関係というものには第二、第三の関心しかないですね。ただ似ているというだけの話です。ところが、ティーゲームなんかのやっているのは一種の歴史研究ですね。事実を並列的に並べるというのではなく、どういう歴史をたどってきたかという時間の問題とか、系統の問題、つながりの問題があるんですね。そういう二つの点において甚だしく違ってたんです。

そこで曲がりなりに、ティーゲームのものなど理論的なものを頭に入れながら、中国文献を読もうということを考えてましてね。大学院に入って待たななしに2年後に論文を書かないといけなことが決まっていた次第ですね。それから何年か少しずつ研究を進めていきました。

私はね、割合論文を書き始めたのは遅いんです。むしろ修士課程の間は勉強はいろいろしましたが、あまり書いてないんです。2年後に博士課程に行きまして、それから書き始めました。今は修士の間から論文を書け書けと言うでしょ。だから人がそういうふうと言うと、私はその時黙ってしまうんですよ。自分がしていなかったから。学生にあんまり言えないんですね。

だから本音を言うと、じっくりと蓄

えて、それから書く方がいいのだという思想は未だに持っているんですね。そういうのは今の学生を育てる間尺に合いませんでしょ。矛盾は感じながら今に至っておりますけど、その時には修士課程の間はほとんど外へ発表することなく、調べることをしました。その途中で、反省や新しい発見があった、そういうふうでした。

吉川 でも、先生の御本のなかに、今のおうふう社の及川篤二会長に本を書いて欲しいと言われたとありますから、先生がお書きになったものを見て、そういうふうと言われたのではないかなと思っていたのですが。

中西 ですからそれは後のことですね。

吉川 学位論文を書かれたのは34歳の時です。

中西 修士課程を終わるのが25歳くらいですか。25歳まではまったく外に発表しませんでね。28、9歳くらいの時に、鎮懐石という『万葉集』にもあるし中国にもあるものをテーマに、上下になるような論文を『国語と国文学』に初めて発表しましてね。

おうふう社から言ってくれたのは、東京学芸大の助手をしていた30歳のちょっとあとですね、その時に「本を出したい。膨大であればあるほどいい」と言うんですよ。これはえらい見識だね。大きい本なら大きい本の方がいいと言うんですよ。ところが、できたからと学位論文を持っていきましたら「多いですね」と言うんですよ。だからきつとコストの計算になると違ったのかもかもしれないけど、それでもね。えらい男だと。私より年下じゃないかな。今会長でいますけど。今度また、古希だから、膨大なものを書

けと言ってるんですよ。

吉川 1800枚の論文という東大の博士論文の中でも分厚い方ですね。

中西 そうですね。

吉川 芳賀徹先生が「中西進氏は風采も挙措もいつも端整だ」と書いておられます。先生は淡々とした文章だと思えますが、芳賀先生もおっしゃっているように、非常に博学でなければできない仕事をなさって、その結果、自然に比較研究ができると思うんですね。

風流ふうりゅうと松拍まつぱし 文献資料と民俗芸能

吉川 私は晩学派で、父親から早稲田の郡司正勝先生のところに行けと言われて行ったのですが、修士の3年まで何をどうしていいかわからなかったんです。学部の時は一応「日本の演劇史における風流の展開」ということで、成瀬一三がどう言っているのかとかいうようなことを書いたんです。

中西 本質的ではないですか。

吉川 でもその後、何もできなかったんです。修士の3年目に『かんもんぎょき看聞御記』を読んで、修士論文は『看聞御記』における風流』ということを書いたんですが、口頭試問の時怒られまして、「1冊の本でやったのは何事か。傍証がない」と言われたんです。

ただ、運が良かったと思っているのは、後崇光院伏見宮貞成親王が一人で書いていますから、これは風流だとか、これは風流ではないということ、「不風流左道の体なり」などと書いてあるんですね。風流はジャンルの名称ではなく、主観を伴う性格の名称だと思うんです。これに風流というものがある



中西 進 (なかにし・すすむ)

万葉集など古代文学の比較研究を中心に、日本文化の全体像を俯瞰する研究・評論活動を進める。平成16年4月1日から京都市立芸術大学学長。文学博士。昭和4年東京生まれ。

東京大学大学院博士課程修了。成城大学教授、プリンストン大学客員教授、筑波大学教授、国際日本文化研究センター教授、帝塚山学院大学教授、同学院理事長・学院長、大阪女子大学長等を歴任し、現在、奈良県立万葉文化館長を兼任。国際日本文化研究センター名誉教授、日本学術会議会員、文化功労者。

『万葉集の比較文学的研究』で読売文学賞・日本学士院賞、『万葉と海彼』で和辻哲郎文化賞、『源氏物語と白楽天』で大佛次郎賞、京都新聞文化賞などを受賞。

『中西進万葉論集』(全8巻、講談社)、
『万葉集全訳注』(全5巻、講談社文庫)、
『中西進日本文化をよむ』(全6巻、小沢書店)ほか著作多数。

かないか、これは風流であるかないか
 という事は、たくさんの方が書いた
 記録をいっぺんに見たのでははつきり
 わからなかったと思うんです。しかし、
 そう言われたものですから、東大の史
 料編纂所に6カ月間通って、前半の方
 の正月から3月に行われる松拍まつばやしがどう
 なっているのかを考えました。

その時に自然に、演劇の3要素といわ
 れる、俳優と観客と劇場ということが浮
 かんできました。どういうものが松拍か
 わからなかったものですから、まず演じ
 る人によって違いがあるのかというこ
 とを考えまして、次に同じ人が禁裏で
 する場合と室町殿でする場合で違いが
 あるか、場による違いを考えてみたん
 ですよ。それは文献資料による研究だ
 ったんですが、史料は『万葉集』みた
 いなそのものの記録ではなく、ただあ
 ったということとか、「一興申して退
 出」程度のことしか書いてありません。

室町初期には、初春に行う松拍と盆
 に行く念仏はやしものの拍物とがあるんですが、
 その風流の趣向が同じだったりするん
 ですよ。「九郎判官奥州下向の体」と
 いう風流を両方です。ただ何回も繰
 り返しているうちに正月はこれがい
 い、盆はこれがいと選択されていっ
 て趣向が定着するのだと思うんです。
 そういうことを考えていたのですが、
 先生の『万葉集』のようにすっかり記
 録されたものではなく、史料の中では
 芸能についての情報が少ないので、
 詳細はわからないのです。

先生の御本の中では名称、ものの
 名前をとて大事にしておられますね。
 最近の京都新聞の「中西進の小倉百
 一首を歩く」の記事でも、「名古曾の
 滝



の文のように、名前がもたらすもの
 のことが強く書かれていますが、芸能
 では田楽、猿楽という場合、田楽法師
 がするものはすべて田楽であり、猿
 楽法師が演じるものは全部猿楽とい
 うように、芸能の分類による名称で
 はないんです。ですから私はある芸
 能の名称を持っているものの形はど
 ういうものかを考えないといけな
 いだろうと思って、変容していても
 形が伝承されている、地方に残っ
 ている民俗芸能の研究の方に行っ
 てしまっ、まだこちらの文献研究
 に帰ってきてはいないのですけれ
 ども。

装置として作られた生命力

吉川 先生は中国との関係を最初に注
 目されたということですが、大文化
 の中国文化に対して、日本文化はあ
 る意味で小文化だと思うんです。だ
 けれどもいいところは、日本人は
 風流の精神を

大切にしていることではないかと思えます。先生の御本でも「瑞々しい」ということを非常に大切にされていると思えます。「風流は風情の義なり」とされていますが、そこには瑞々しさが必要なんだと思うんです。

瑞々しいという枠を打ち破ったのが「かぶき」で、風流の中から近世になる時、ものすごく飛躍したのが「かぶき」だと思うんですが、中世の風流においては、まず瑞々しいということが絶対条件ではなかったかと思うんです。

中西 風流における瑞々しさというのは、たとえばどんなようなことを？

吉川 作りものの風流、たとえば祇園祭の鉾などもそうですが、ただ機械的であるとか、ただのデコレーションではなくて、あくまで自然で、そこに生命が宿っているように見えるということだと思うんです。それは先生がお書きになっている中でも、生命力ということが取り上げられていますが、中国風にいうと生動しているということが必要なんだと思うんですけど。

中西 おっしゃることに大変賛成で、今思いつくことは、ついこの間松竹座で初春大歌舞伎を見まして、歌舞伎というものを改めて認識したんですね。そうしますと、歌舞伎はこんなのウソだよというのがいっぱいある。対面している人間の時代が合わないとか。大石内蔵助は大星由良之助になるわけでしょ。これも妙な話だし。舞台は『君の名は』どころではなく『冬のソナタ』どころではなくて、転々と飛ぶわけですね。

そうすると、皆「あんなのはわざとらしい」と言うんですけどね、私は、歌舞伎という大きな舞台は一つのアー

カイブスだと思ったんですよ。いろんなものが収蔵されている。それが極めて真実に基づかないで集められてきまして、芝居仕立てにしてある。その時のプリンシプルがあるわけですよ、出たらめではなくて。

ではそれは何かというと、ヒューマンドラマ、人情劇というものではないかと思うんです。彼らは人情劇を作りあげようとしたら、事実なんて、どうでもいい。空間なんて、どうでもいい。実在人物なんて、どうでもいい、ということまで居直って、ひたすら人情を中心としたフラグメント（断片）を方々から集めてきて作るという、そういう意味の人間性が目指されてるのだけれど、結果として断片を集積するものだから、そのものの自然の発露としての生命力はない。

そこでこう一つ変容しているという気がしますね、今のお話を伺っていると。そうすると、その変容は何かというと、ある一回的な完結した事件なり人物なりの生命力ではなくて、一つの文化として、装置として作られた生命力といったものに変容していく。

それはおそらく今の風流とかおっしゃっているような時代の、人間の持っている芸能と、もうちょっとその時文化が爛熟していった体制化していった、システムティックになっていった、その時の典型が歌舞伎だと思いますが、そういう違いだと素人は考えますが、それではよろしいですか？

吉川 先生は素人というわけではないと思いますが。郡司正勝先生がおっしゃるように歌舞伎も風流の精神の発展上にあるんだと思うんです。風流は耳目を驚かす

ことが一つの大きな特徴だと思うんです。歌舞伎は郡司先生が言われたように、「かぶき（傾き）」で傾いているものですから、当然その当時の人たちの耳目を驚かしているものだと思うのですが、それはいっぺん見れば飽きてしまわれる、きわどいところまで踏み込んでしまったわけです。だから絶えず新しい趣向を凝らさないといけない。

『曾我の対面』を江戸では毎年正月にするわけですが、郡司先生はもし内容を変えることができなければ、^{びだい}外題だけでも変えるんだとおっしゃっているんですね。今の先生のお話を伺っていると、何とかの世界ということによく説明されること、たとえば、曾我物の世界の、助六実^{まこと}は曾我五郎という形だと思うのですが、それは趣向ではなくて、もしかしたら主人公が生きて、ずっと伝わっているというか、生き続けているかもしれないと思うのですね。

中西 変形してね。

時間意識と叙事性

吉川 東大寺の^{かみつかさ}上司海雲という方が昭和47年に東大寺の住職、別当になって晋山式をされた時招待されて伺うと、大仏の前で読まれた「^{でんどうほうご}伝灯奉告」で、「それ大本願聖武皇帝をはじめ奉り」とおっしゃったんですね。我々は確かに大仏開眼は752年と知っているわけですが、そこでその方の声を通してこられると、ずうっと聖武天皇が大本願であり続けているのだとか、1200年の時間がずうっと継続しているように聞こえたのですね。

芸能ではない晋山式に東京から行っ

てみて、そこで発見することができたのは、先生も「時間」ということをとても大事に考えておられると思います。が、時間というものは継続して私たちにどうつながっているかということだと思っんです。私は昔、一誠堂で藤原定家の記録の切れを短冊にしたものを買いました。「叡覧において鼓張行す」とあり、芸能に関係あると思って買ってただ持っていたんですが、ある日800年前に定家がここに触ったんだと思ったら、ソクソクっとしたんですね。

芸能は有形の物として伝わっているわけではないですけど、ことばとして発せられる時、蘇ると思うんです。万葉でもある時に詠まれたのかもしれないけれども、多分伝承されて、しょっちゅうたわれてきたから伝承が伝わっているのではないかと思っんです。

万葉は文字化される前には、どういふふうに鑑賞されてきたのですか？

中西 その前に、お話を伺って思いだしたのですが、ずいぶん前にイギリスのロイヤル・シェイクスピア劇団が日本に来た時に、3人くらいが舞台の上で座って朗読をしたことがあるんですよ。それはシェイクスピア劇の中から台詞をいろいろ取り出して一つのストーリーを作って朗読した。3人くらいですから、そこに一つの対話もあるんですが、それが実に見事だったんですね。ただ単に語っているだけですから、アクションはないんですよ。しかし感動しました。それはなぜかという、これは『古事記』ではないかという気がしたんです。

シェイクスピアが一つ一つの物語と

して関係性を求めて作っているものの基本には、まさに今のお話のような時間意識、叙事性というのがあるんですね。叙事は時間の概念ですからね。叙事性がある、「ああ、『古事記』はこういうものか」と思いました。『古事記』は本来的な語りをポツポツと切りまして、すでに『古事記』の下巻あたりだと、御代という天皇の統治の時間を意識しているから、「誰々天皇の御世」とある『万葉集』にもあります。極端にいうと、『源氏物語』にも、「いずれの御代にか」という代というもので時間を意識しようとする考え方がずうっとありますでしょう。そういうものがやはり『古事記』の中にもすでにできている。それを取っ払うと『古事記』の下巻は極めて物語的な、ずうっと一人でアイヌのおばあちゃんが語るみたいな、それと同じものが露骨に見えていますね。切っているだけだけれども。

『万葉集』はオペラ 歌語りによる立体化

中西 彼らが切ったものをもういっぺん復元してみますとね、叙事性がある、観客なり、読者なりが、タイムスリップして時間の中に自らを委ねるという体験を強いられますよね。それと同じようなことを今のお話を伺いながら感じましてね。で、そうしますと『万葉集』も本来はそういうものだったと思いますね。私は『万葉集』はオペラだということをよく言うんです。オペラというと、手振り身振りがたくさんあるような感じだけど、まあ歌語りですね。ただ歌うということだけで古代人

は想像力が豊かですから、すぐにそこに動作を復元してしまいますよね。僕らだと、動作がなければことばしかない、ということになるんだけど、彼らはそうではない。

非常にスタティックなんだけど、語られることばを通して立体化させる能力もあるし、そこで立体化されたものは何かと言ったら、今のお話の、ある事件の持っている時間的な経緯、つまり叙事性ですね。そういうものがあつたんだと思う。初期万葉は全くそれだと思いますよ。大きな一つの歌語りがあって、オペラがあって。

ところが『万葉集』には悪いことに個人の意識がすでに芽生えているから、誰々の歌というふうに捉えてしまう。トータルで捉えない。今日いうところの総合教育というものがありません。ではなくて、トータルに捉えるということが古代的な認識でしょ。折角の、荒々しいばかりの生命力を、額田王がいて、誰が返事をした、どこに行った時にどういう歌を歌ったという、そういう個人の発言、個人の作品ということで切っていく不幸せが、すでに編集段階で入っていますね。

私は常に言うんですけど、『万葉集』の歌というのは、作られた時代として見てはいけぬ。作られた時代がある、だけど後の人に受け取られた、その時の恰好で書いてある。これはすでに事実ではないんだということをよくいって、倒叙ということが『万葉集』を理解する時の一番のコンセプトだということです。

極端に言うと、人麻呂や天平の時代に受け取られていた額田王の歌があそ

こに載っている。今みたいに記録するのではないから、変わりますよね。変わることもなんか一切無視して、俺の知っている額田はこうだと書いてある。それを僕らは誤解して、これは7世紀の事実だと思ってしまうという、とんでもない誤解がずっとあると思う。

それを復元するというを先生も今おっしゃっていたと思うけど、元へ戻しますと、違った形のトータルな極めて叙事的でもある、仕組みられた形の中の個人というものはあるはずですよ。

吉川 そのお話は私はとても感動するんです。つまり、結局書かれているもの、記録されているのは、部分だということと、記録する人の何かが入ってしまう可能性があるわけですよ。先ほどお伺いしたものは、記録されるまでの伝承が、どの程度信頼できるのかということがあると思います。

私は目に見えるものと、聞こえるものしかわからないんです。私の先生は国文学の出身でしたが、私たちは早稲田の演劇科に入った時から演劇科なんです。今は文学部として採っていますが、他の学科と違うところは、私たちは目で見て、耳に聞こえるもので勝負するんだと、自然に思っていました。「松拍考」は158枚位の論文だったんですが、郡司先生は「その程度のもをあと2、3本書けば」と思われたかもしれませんが、私は文献史料でいくら書いてみても、歴史学とか国文学の出身の人が文献によって得られる以上のものは私にはできないと思ったのです。しかし、民俗芸能は公開されているにもかかわらず、秘匿されていない身体動作の方は、ちゃん

と見ている人はあまりいないんですね。このことは後で気が付いたことですが、これです。

たとえば、昨年12月4日に、7年目に1度の式年の神楽があったんです。一晩中やっているわけですが、研究者でも途中で抜けたり、睡ったりされるんですが、私にはそれはできないんですね。それこそ先生がおっしゃったように、そこにあるものはトータルで見えてこない。このことはとても大事だと思います。

歌を解釈すること

吉川 『万葉集』にも詞書ことばがきを伴っている歌がありますが、他の国の詩集にはあるのでしょうか？

中西 山本健吉が、日本の詩はオカージョナル・ポエム (occasional poem) だ、という言い方をしているのですよ。オカージョナルというものが詞書になっているということですね。ただ、これは現代的な非オカージョナル・ポエムを元にして言っているのだから、むしろ何かあった時に歌う方が古代では普通だと考えるべきではないか。

『万葉集』の歌は、やっぱりある事柄に付属して歌われたものが、その事柄を尊重しながら残されているということです。ただこれは、民俗学というハレでしょう。歌というのはハレですね。だから、そのハレ性というものを持っているということだから、歌の命に忠実に伝承しているということでもありますね。だからむしろ正しいんじゃないかという気がします。

ただ、山上憶良が『類聚歌林』るいじゅうかりんを作

ったと書いてある。『類聚歌林』によると、この歌は誰が、いつ、どこで作ったと書いてある。それを注の形で『万葉集』に載せています。これは、古代の和歌が出会った一つの不幸だと思うんですよ。山上憶良という考証好きの男が、いつ、どこでというふうに詩を理解するのは、極めて近代的です。だから素晴らしいんだけど、非古代的な、そういう運命を背負わなければならなくなってしまった。

吉川 詞書のことに戻りますと、私には忘れられない歌があります。ある人の歌集にあるお歌会始の入選歌で、「^{つま}帰ってくる夫の靴音折々の心の動き我は知りけり」というものです。非常に健康な、奥さんがしっかりしているような感じの歌なんです。ところが私はその歌を見てドキッとしたんです。その歌は息子の嫁を意識している歌ではないかと思ったんですね。その息子は新聞記者をしていましたが、どう書いても新聞に載せてもらえなくなった時期がありました。その人は結局、鉄道事故で亡くなったのですが、自分はしっかりしてきたんだ、嫁も夫の心の動きを知っていてくれたら、と言っているように思ったんですね。和歌、歌というのは、詞書をつけなければ、いろいろに解釈できる。母としては、そういう思いが募ってしまったと思うんですが、世間一般にはそう見えないように詠んでいる。多分、お歌会始に陰惨な歌が選ばれるわけではないでしょうから。

私は前の前の大学では中世文学に属していましたが、同僚に「説話は誰でも努力すればできるが、和歌は頭が切れないとだめなんだ」と言われたんで

すね。演劇専攻の私は、中世文学の先生になれと言われた時、藤平春男先生の歌論の授業を2、3か月聴講させていただいたことがあります。藤平先生はとても冴えた方だと思いましたが、『万葉集』はただ鋭さだけでは太刀打ちできないものがあるようで、先生のご著書の中に、万葉というものはいろいろ大きな問題があるとお書きになっているのは、そういうことではないかと思うんですね。

日本人のアルカイック回帰 地下水としての『万葉集』

吉川 古代にはもっと大きなことがあって、先生がおっしゃっている日本の独自性と、古代における汎人類的な、グローバルなつながりを、両方持っているのが万葉ではないかと思うのですね。だから先生が、原風景ということを考える場合に、多くは近世に成立した風景をもって日本の原風景だと誤解されてしまうけれども、日本文化について原風景ということを考えるのなら、古代まで行かないといけないとおっしゃっていますね。

ところが、民俗芸能、伝統音楽といった場合、古代からのものだとは明確にわかるものはありませんし、ほとんどないと思うんですね。そうすると、頼りにできるのは、先生がさっき歌舞伎のことでおっしゃったように、古代にあったものがいくら変化していても、その中に古代のものを残していることかなと思うんですが。

中西 日本人はアルカイック回帰が好きな民族だと書いたことがあります。ア

ルカイックなものというのは発展的歴史観からいえば、どんどん捨てていくわけでしょう。ところが日本人はそれがいつもいつもお臍あたりにあって。だから、いわば歴史概念というものが、推移というよりは停滞といえますか、反復して歴史が流れていくというふうな。多少の変化はあるのですが、繰り返しながら進むという、そういう事柄が一つあるんじゃないか。

これはやっぱり単一民族のせいだとはもちろん言いませんが、こういう列島弧の中にあって、大陸の凄まじい争いからワンステップ離れたところで営まれた歴史があるという気がしますね。だから、たとえば小林秀雄は「歴史は思い出すことである」という言い方をしている。あれは別に思い出しているわけではないけれども、思い出されてしまう。それがきっと歴史の中にあるのではないのでしょうかね、日本では。

吉川 また、その『万葉集』も、ある意味でカムバックしているんですか。今、非常に受け入れられて。

中西 ああ、そうそう、それはね、私はさっきグローバルという話もしましたけど、いつも地下水に譬えているんですよ。ずっと脈々として流れている地下水のようなものだ。だから、地上が涸れますと、ポーリングして『万葉集』を汲み上げていくんですよ。

たとえば、王朝文学という一つの大きな完成された文化があって、それがだんだん変になってくる。武士が変にしたんだけど、それは、藤原定家あたり、まさに新古今の時代です。そうすると『新古今集』^{もののみ}は武士集といわれて、武士のものをたくさん採ったんですよ。

ね。しかしそれはその前の八代集とは全然違っている。

武士集を武士集たらしめたものは何かというと、やっぱり万葉的な要素ですね。源実朝の『金槐集』なんか特にそうでしょ。それを汲み上げてくる。万葉が地下水のようにあるからそうなる。しかもそれはなぜ地下水なのかというと、普遍的な存在としてあるからです。川ですと、流れてしまったらおしまいです。涸れもしないである。これがアルカイックで、ユニバーサルなものだから、そうなるんじゃないか。

別の言い方もできまして、どうも私は日本文化というものは、平安時代に完成されたものだと思うんですよ。奈良時代の文化は、プレ日本文化というべきものです。10世紀以降の日本文化が本当に日本文化だ。それから12世紀以降はこれが変容していった文化ですね。

そういうものだから、今の万葉論でいえば、万葉は日本文化が完成する前のものだから、まさに地下へ潜るようなものでもあるわけだし、いつも源流としてあって、それを完成されたものからみれば、アルカイックなものではないかという気がするんですけどね。

類似性の価値観

吉川 そういうところが、たとえば『万葉集』は今、我々が見る形の前の形があるということを書かれてますね。その中で、前は捨てていたけれども、これも万葉に拾っておこうかという作業もあったのかもしれないのですか？

中西 膨大なものがあったと思いますよ。さっき、まさに八レのオケージョナ

ル・ポエムだという話をしたけれども、それがあると、あらゆる人が歌うわけですね。だからプロとアマなんていう違いはほとんどというか、まったくなかったと言っていいでしょうね。風土記の中で歌垣で歌われる歌は膨大にあって、いちいち載せきれないと書いてある。まさにあの通りでいっぱいあったのだと思う。

ただ、何でもいいかと言うと、しかし面白い歌、皆に記憶される歌というのはおのずから決まっていて、それはそんなに膨大にあるにもかかわらず、繰り返し出てくるんですよ。『万葉集』でも同じ歌が載っていたり。それはもう皆が常に今日的、現代的な歌であったということだったのだと思いますね。間違っただけで載せたなんていうものではないんですね。それがだんだんとセレクトされていって、誰が名手であったということになる。

山部赤人という人がいますでしょう。あの人はいかかわりそうな人でね。聖武天皇の時代は一にも二にも天武天皇の時代を再現したかったんですね。そうすると、天武、持統朝には柿本人麻呂という宮廷歌人がいる。それと同じ歌人が必要だったわけですね。で、誰かいないかと探したら赤人がいた。じゃお前、歌を歌えといったものだから、赤人は人麻呂の真似をすることがサラリーの根拠なんですよ。だからね、真似をする。今、我々は個性、個性と言うでしょう。そうすると赤人は個性がない、人麻呂の真似ばかりしているという文句ばかり言うんですよ。これでは赤人は立つ瀬がないと思います。真似することが役目だったんですから。

そういうことを言いますと、個人的にどう人と違っているかということより、価値は違ったところにあるんですね。じゃあ何が違ったかといったら、とにかく面白ければいいんだと。聴衆を満足させればいい。それがオリジナルであるか盗作であるか、というかそんなものはどうでもいい。私はこれが本当だと思うんですね。

吉川 ご存じのように、歌舞伎などは本当に、「盗作」してよくなっていくんだと思うんですね。それは盗作というより集積みたいな、元のものにどう自分が手を加えるかというのは、それは私はある意味で風流の精神の中にあると思うんですね。

中西 さっきのアーカイブスはそのなんですね。同じことだと思います。

パイオニア精神と独自性

吉川 先生の考察の方法で、比較文学的という方法をとられたのは、中国との関係が未開拓の分野だったからで、最初に目をつけられたということですが、その他にことばの考察の方法、国語学的な分析が鋭くて素晴らしいと思います。先ほどおっしゃったような、奈良時代になかったことばを、これは平安時代になってから出てきたことばだとかおっしゃっていて。

私が出た高校は、東京の府立4中の戸山高校でした。その先生のお一人が『伊勢物語』を読んで、「これは初めて」と、初見のことばを絶えず指摘しておられました。それは、平安時代がある意味で我々の世界につながる原点かもしれないと、ことばで示唆され

ていたのかもしれないと今思いました。

私は先生の、語源とかことばの組み立て方についての文章を読ませていただいて、先ほどの芳賀徹先生の解説を読みますと、私たちは残念なことに、先生のような方が日本文学論とか文学概論をやってくださっていなかったから、日本の古文はただ古めかしいもので、古色蒼然としたものをやっているように思っていたんですが、そうではなくて、一つ一つの作品が生まれる時点においては、スリリングな可能性がある中で、定着、ということが行われていたのだらうと考えさせていだいて、ありがたく思います。

中西 それはもう、あらゆる場合にスリリングであるということが、前進もさせるんだし、受け取られもするんだし、そういうものだと思いますね。ただ、スリリングであるのか、きわめてデンジャラスであるのか、それはまた違いますが、しかしそれぐらいの精神がパイオニアの精神ですよ。

我々はパイオニアでなければいけない。いつも学問は後追いではないんですと、よく言うんですよ。文献学派は、なんか後追いだと思っている。分析するのに文献がないとできないと言うんですよ。そうじゃなくて文献というものを餌にして、貪婪にそれを食べながら、そんなものを踏み倒して前へ行く、これが学問なんだと。いつも国語学でも国文学でも思うんですけど。

吉川 ですから、少なくとも研究の対象が新しいというだけではなく、その対象に伴って必要な方法の問題が必ず出てくると思うんですよ。

中西 そうそうそう。

吉川 それを持っていらっしやらなければ、新しい学問というよりか、その先生の独自性はないのではないかと私には思われます。

中西 そうですねえ。

意味の伝承を探る

吉川 民俗芸能の場合はほとんど記録はございませんから、「松拍考」を文献の研究で書いたあと、熊本県菊池市に民俗芸能として残っているものを見て、室町殿でやっていた観世の松囃子はこういうものではないかと思っても、実際は跡づける文献はありませんでした。法政大学の表章先生に、観世宗家にある文献の中に似我じがと左衛門国弘という観世の太鼓方の「松囃子書付」が出てきたから見に来なさいと言われて、見に行きつきました。菊池の松囃子の三段目の「春の海の東よりなびき収まりぬ、西の海唐土船の貢ぎ物」という能風のことばが書かれてありました。

菊池の松囃子ですと、そこは三段目にあたっています。最初は「天下太平国家安穩」ということばだけの開口があって、二段目の直前に「毎年ご嘉例の松を囃し申そう」と言っていますから、二段目が松囃子の本体のところだと考えられます。それに三段目をくつつけたのだと思うんですが、室町幕府の將軍の御代をこまごま時には、一、二段目は俗っぽくて品がないように思われたのか、観世の猿樂衆に三段目だけをやらせるようになったのではないのかと思いましたが、これは三段目だけを三段に分けている。私は松囃子は

三段にやらないといけないとされる伝統があって、一回で済むところを三回も繰り返すようになってきていると思ったんです。

芸能の方では先ほどおっしゃったように、新しい形はなかなか採りにくいと思うんです。ですから、今ある形は変容しているかもしれないけれども、変えられなかった部分があるかもしれない。そこを捉えるのが私たちの仕事ではないかと思っています。伝統芸能は形の伝承がありますから再演できませんが、再演できてもその形にした意味の伝承は失われているので、意味は類似のものをフィールドワークで比較検討して考察しようと思ってきました。

で、私は先生がすでにやっていらっしゃる比較文学は意味も考えるもので、形をただ比較するというのではないと思うんです。

中西 不易流行ということばは極めて便利で、それなりに安っぽく、いつもそこに逃げ込んでしまうという傾向がありますけど、結局、流行というものが常に工夫されていて、それがずっと永続的な価値を与えるわけでしょう。だから、今のようなお話も、変えてはいけないという古典性というものがあった、これが絶対に権威を作っているわけですよ。古典落語と同じように、繰り返したってそんなものはみんな気にしないで、面白ければ面白いと言う。そういうものがありながら、常にそれがヴィヴィッドに生き続けるところで演者の工夫みたいなものがある。

この間、松竹座で、「時平の七笑い」を聞きました。七種類に笑い分ける。あれなんかだて、役者がいろいろ工

夫するわけでしょう。そういうものは、常に舞台芸能の、あるいは身体的な芸術表現の中にはずっとあるんでしょね。そのへんのところを『万葉集』でいうと、文献というよりはもっと音声的なものだと思いますね。

吉川 先生がお書きになっているものの中に、見るということは褒めることだとあるのは、私は素晴らしいと思いました。それから、振り返るといのはむしろ呪詛するような意味もあるとか。

というのは、私は昔、六世野村万蔵の『武悪』を見たんです。万蔵は主人の役をやっている、召使の武悪は不埒なやつだから殺してこいと太郎冠者に命令するわけです。ところが殺しに行った太郎冠者は朋輩ですから、可哀相で殺せなくて帰ってくる。報告にきた時、主人は前の方にいて、太郎冠者は下がったところにいます。主人はひとこと言うたびに後ろを振り向いて、本当かと訊く。その振り返る動作にすごいと感じるものがありました。というのは、それまで万蔵を高く評価できなかったのですが、その1回ずつ振り向くたびに表情が段階を追ってわずかわずかわるんですね。それを見て、あっ、これだけ顔面の表情を区別できる人だということを見出して大いに尊敬するようになったんです。

その時に、ただ疑って訊くというより、先生の言われる、振り返っているような演技になっているところがあって。対等な存在に向かって言っているのではないというように見えたところが、万蔵のすごいところだったのかもかもしれません。

ペルシャとか中国の馬に乗って動物

を射止める時、必ず後ろを振り返って撃ちますね。そういうところは関係がございませんか？

中西 今思い出しましたのは、狂言で、留守の間に酒を飲んでしまう。その時に酒の中に主人公が映っている。後ろから覗いているんですよね。こんな盗み酒をしているから祟りで現れてきたんだというふうに言うんだけど、実はそこにいますね。その演出と同じですね。

日本語の細やかな精神

吉川 私はただ単に演劇として、形の方で考えていたんですが、振り返るといのは、もっと深い意味が元はあったんだということがやっとわかりました。今度、我々の分野のものを見る時でも、そういうことを考えて、日本語が持っている意味を考えなければいけないと思います。

そして、私も音楽だとか身体動作のことを、それぞれの要素がどう働くかという機能を考えて、音楽やことばはだいたい神がからせるということに使われるものですから、そういうことも考えていたのですが、先生の御本でもっと細かく「マ」といのは何か、一音で「サ」といのは何だというような機能があることを知りました。

そういうことを教えていただくと、日本語というの曖昧で取るに足りない言語のように思われがちですが、実はとても微妙に精密な作業を含んでいる言語なのかなと思いました。

中西 小学生に今、教えていましてね。その中に、ものは皆、新しい方がいい。だけれども、「人は経りにし、よろしか

るべし」という歌があるんですよ。「人間は古い方がいいんだぞ、新品なんかだめだ」と言っているようですが、そうじゃない。「人は経りにし、よろしかるべし」。

人は年寄りがいいのではなく、経るのがいい。「経る」というのは経験することですから。経験していった人間が経るくなった人間であって、年寄りは年をとった結果だけの人間なんで、違うんですよね。私は「経験知」ということばが好きだけど、その経験知を持っていることがいい。「人は年寄り、よろしかるべし」などとは言わないで、「人は経りにし、よろしかるべし」。

また、その「よろし」といのは「良し」とは違うんですよね。「悪くない」という意味で、「良し」は「いい」という意味です。だから学生のレポートに、「良し」と「よろし」と書き分けて返すんです。よろしというのはいいいのではない、うん、悪くないよということです。つまり歌は経験を積んだ人間が悪くないじゃないと言っているんですよ。これはすごい発言です。年寄りがいいんだというのとは全然違う。

そういうことばにこめた細やかな精神が、だんだん今なくなっていますね。これでは古典の理解もできないし、現代生活もカサカサしてきてだめですよ。

後ろから拝む

中西 反対がいいという話は『万葉集』の中に、かさのいらつめ笠女郎という女性が、大伴家持に恋をする。家持は知らん顔をしている。その時に、最後に笠女郎が悪態をつきまして、「こんなに一所懸命思っ

いるのに思ってくれないのは、餓鬼を後ろから拝むみたいなものだ」と言っているんですよ。餓鬼をわざわざ仏師が彫刻するかといったら、そんなものありませんよ。餓鬼像は今残ってないでしょう。嘘なんですよ。それも気がつかない。

「後ろから拝む」というのは「役に立たないのだ」というのが通説で書いてある。ところが、前から見ているというのは褒めるんですよ。褒めるの反対は、だから、けなしたり、くさしたり、呪ったりしている。それが後ろだから、結局家持はがりがりの餓鬼にされてしまって、後ろから呪われていることになるんですよ。それが前とか後ろとかいう違いによってわかってくることなんですよ。だから、いっぱいあると思いますね。

吉川 ですから、その身体の位置は大事なんですよ。たとえば、郡司先生は『源氏物語』を読んでいる時、それぞれの人物はどういう配置で座っているかを考えるんだとおっしゃったんです。美しく見えるためには光を背にした方がいいとかいうようなことをおっしゃって。その流れの中で鼻忘れというのが美人なんだというようなことをおっしゃっていたんですけど。

私はそういう点は郡司先生から教えていただきましたが、後ろから見るとか、後ろを見るとかについてはまだ郡司先生はお考えになってなかったのかもかもしれません。郡司先生は「自分は学者じゃない」とよく言っておられました。『かぶきの発想』『おどりの美学』など、民俗的な発想を大事にされていたと思いますが、今風にいえば、基層

文化を組み立てている論理を追求しておられたと思います。

「をどり」の語源と動作

吉川 日本には舞と踊りの2種の舞踊が伝統的にあり、「舞踊」ということばは、坪内逍遙が使ったことが始まりだといわれています。舞は「まふ」が語源で、語源も核としている動作が回ることだとわかっています。踊りは「踊り上がる」だから跳躍だということを、柳田国男や折口信夫も言っていますが、「踊り下り」ということばが『今昔物語集』にあり、新羅の川を船で行った時、岸から虎が「踊り下り」という表現で出てくるわけです。それで、踊りは「をどり」ということばだけで考えなければいけないことになります。

「をどり」ということばは、語源も動作もわかりませんが、動作から考えると、海老のおどり食いというように、尾をとるような動作に関するような、収縮して伸びあがるような動作ではないのかと思っているのですが、もしご存じのことがあったら教えてください。

中西 いや、単純に「をど」ということばをずっと探しますとね、必ず上下関係がありますね。たとえば、神様がまさかやまつみの身体から生まれる、頭からはまさかやまつみの正鹿山津見神が、胸からはおどやまつみの於藤山津見神というのが生まれる。女ですからね、要するにおっぱいなんですよ。「驚く」もそうでしょう。ドキドキするというようなねえ、上下運動。それから、今の「踊る」も跳び上がった。だから、虎だってポロツとおっこったんではなくて、ピョーンとこう、おりたんですよ。これ

はやっぱり、踊り下りたんですね。

吉川 いっぺん、「をど」ってから下りるんですね。

中西 まあそうですね。だから^げ下も踊りのなかだと思えますよ、^{しやう}上がありや下があるのですから、下から上というのはちょっとないんですけども。だから、そういう上下運動と円運動と、それが舞踊で。もうすべてじゃないですか。舞うのと上下と、足としてはね。

吉川 そうですね。ところが、実際は歌舞伎の踊りにしろ、盆踊りにしろ、跳躍する動作はほとんどないんですね。そうすると、日本の「踊り」といっているのは、ほとんど跳び上がらない踊りです。盆踊りは一連の動きのフレーズを繰り返すだけで組み立てられていますから、何拍かで元の動作に戻ってくる。24拍とか6拍とかで戻りますが、その中に同じ足を2回続けて動かす動作がある。

それは、先生もヴァーティカルとホリゾンタルということを考えておられるように、ホリゾンタルな動きになっていますが、もともとはヴァーティカルに2回ずつ跳びはねていたんだらうと思うんです。それが、盆踊りは初盆を迎えた死者の霊をこの世からあの世へ送り届けるために、夜明けまで踊り続けなければならなかったのだ、長時間踊る必要があって変化したのだらうと考えています。

中西 それは気がつきませんでした。

吉川 そのような足の動作があるのは、念仏踊り系統の踊りです。獅子舞とかにはまったくないのです。私は踊りは上下の動きで、その結果として動作が途切れるということが特徴なんだと思うんです。

舞は動作が連続してつながっていく。ですから、歌舞伎の踊りでも跳び上がったりはしないのですが、動作は首を三つに振る時でもちゃんと、こう首を三回にわけて区切った動作をする。

盆踊りのオドリの動作をあらわしているのが、ボンアシ（盆足の意味か）といわれる足の動作で、左左、右右、と同じ側の足を2回ずつ動かします。ボンアシはその足を前に出すのですが、それでは誰でもでき、見物人からお金をとれないので、歌舞伎舞踊ではオスベリという、足を後ろに滑らせるものになっている。その時に、歌舞伎舞踊には動作を示す歌詞がありますから、オスベリをしながら泣いてとか文を書く動作を手でやっているものですから、オスベリという足の動作はだんだん省略されて、まったくない曲もあります。だから、古典の芸術的な歌舞伎舞踊を分析しても、オスベリの動作がないものもあるので、オドリという動作はどこかはわからなかったのです。

私は、芸術舞踊の基盤となる民俗舞踊の盆踊りを調べていたので、ボンアシの動作との対応関係で、オスベリがオドリの核になる動作だと発見することができたんですが、方法論としては、先生がおっしゃった踊りはあくまで上下運動だということで、理論的裏付けができるのでありがたく思いました。

中西 摺り足は、古代ローマでも神祭りの時に使われる動作だと聞きました。足摺岬というのも海の彼方の神様を呼ぶ、その時の動作としての摺り足。お相撲も神事でしょう。そうすると、必ず摺り足でやる。ばたばたした足ではすぐにやられてしまうんだけど、あれ

は、手段としてやるんじゃないで、戦いの様子ではなくて、やっぱり神事芸能の名残として摺り足で攻めていくとかですね。今のオスベリも絶対に上げないという、その辺から上下運動というものが変わっていったのではないのでしょうかね。

ハリソンの『古代祭祀と芸術』で踊りを評価していますでしょう。跳び上がるだけ穀物が伸びるという。だから、今でもネイティブの人たちは、ばあーっと跳び上がりますよね。

吉川 そうだと思います。先生のお説はいいと思います。

中西 もとはね。しかし、おっしゃたように、跳び上がる動作は、日本の芸能の中ではきわめて少ないということに今改めて気づかされて、研究してみたいと思うんですよね。で、「摺り足」を岩波の『日本古典文学大系』の索引で見ますと、必ずしも、摺ることが宗教に全部結びつくとは限ってないんですよ。まだ研究途上ですが。

吉川 いえいえいえ。

中西 なぜ「足摺岬」みたいなものがあるのか、俊寛の足摺りがなぜあるのか、帰ってくる船を戻すというマジカルな足とかですね。海の彼方の神を迎える。これは『万葉集』にも例があります。そういう祭場を「足摺岬」といったのではないかと思うんですけどね。

神がかりと走ること

吉川 民俗芸能でフィールドワークをしていますと、日本には現在も本当の神がかりがわずかですが、あるんですね。神がかりなんてとんでもないと否定さ

れる学者もいますが、実際にあるのを見ていると、神まつりの場の音とかことば、太鼓の音や祭文とかで、動機づけられて、立ち上がってしまうんだと思うんです。じっと座ってはいられなくなって立ち上がった時に、一箇所に停まっていられなくて移動していくのだと思いますけど。

その動作の一つに、走るということがある。私は国語学の勉強をしたことがないのですが、「走る」というのは日本の場合、「悪に走る」というように暴走するというので、ゴールをめざして走るということはないかと思えます。そういうことをスポーツ人類学会でしゃべったことがありますが、ことばが持っている細かいニュアンスとか、日本語も精密な表現をしているものだと思います。

中西 「走る」はね、名論文がありまして、明治以前の間はノーマルな人は走らなかった。走るの気が違った人だと書いてあるんですよ。それは、つまり神がかりの動作で。オリンピックの種目なんかだってみんなあれは宗教儀礼でしょう。綱引きもそうでしょう。ですから「走る」だって、早く走れば走るほど成果が大きいのですから。神様を呼ぶ力があるわけですから。

吉川 そうですか。私は日本にはヨーイドンとゴールを目指して走るという伝統がないから、2000年のシドニーオリンピックで優勝させた、マラソンの小出義雄監督は、高橋尚子選手を動機づけて一種の神がかりの状態にすることで成功したのではないかと考えました。その理由は、本人は走っているという意識がなかったからこそ、ゴールインした後ケロツとし

ていたことです。つまり、神がかりの一種の表現のように走ったのではないかと、中・日・韓合同のスポーツ人類学会で発表しました。

中西 ああそれは面白いです。ものすごく面白い。

吉川 とにかく、日本人の場合には、「する」と「なる」の動詞の違いがありますね。私たち日本人は意志を持って何かを「する」というよりは、「なる」という方が、自分のからだも受けとめやすいのではないかと思うのです。ですから、普通は舞踊というと意志のある動作を対象にしていますが、私は震てしまうとか、その前段階のところから考えていって、人間は何かに動かされて舞踏的な動きをするのだと思うのです。

郡司先生は「東洋の舞踊は止まるという意志がある」とおっしゃったのですが、私は、走ってはいけないうと同じように、立ってはいけないうものと思わず立ち上がってしまう、そこから舞踏の動きが始まると考えています。だから、よく能で囃子の音楽によって、純然たる舞踊を見せる「舞事」といわれる部分の前後にことばがあって、舞い終わった後に恥ずかしいとか言いますね。それはつまり、こんなところを見られたのが恥ずかしいと思っている。走ってしまった姿、舞ってしまった姿は狂いの表現そのものなので恥ずかしい。舞事の中にことばが入らないのは、神がかった時は走ったり、跳び上がったといった動作をしますが、抑えつけられて動作を封じられた時には、ことばを発する託宣をするのではないかと考えています。

中西 憶良だといわれている歌の中に、

子供が死んでしまった時、「立ち踊り、足摩り叫び」というのがありますね。やっぱりあれは驚きの表現として使っているけど、もう一つ前は神まつりの表現ですね。自分をそこでトランス状態にした。それが「遊ぶ」ということばだと思いますが、そこに神様が降りてくる。その結果じゃないですかね。あれが出てくるのは。

枕詞の役割

吉川 それから、先生は枕詞というのは普通は修飾語のように受け取られているが、そうではないとお書きになっておられますね。

中西 ええ、そうそうそう。それは、はからずもソシュールの言語説と一致しているんですよ。私ソシュールを読んでも、ソシュールもそういうことを言っていますねえ。

つまり、一つの選択であって、たとえば「射干玉ぬぼたまの」というのがあると、次に夜があつたり、光があつたり、闇があつたりする。そういうものに続いていく、何を次に選ぶかという、その関係ですね。で、しかもはっきりしてしましてね、射干玉は黒い実の植物の名前。闇なんていうものは実体がないんですよ。闇を描いてごらん、夜を描いてごらんと言われても何もありません。非常にアブストラクトなんです。

抽象的なものに対して、具体的なものを重ねる。抽象と具体という、およそものの認識の両面を、一緒にするのが枕詞だ。

これはどうもソシュールだけではな

くて、ロラン・バルトが言っているのも同じなんですよ。私、人の説をあまり読まない。だから、さっきの風流や芸能と同じように、こうこうだからこうというのではなくて、「こうするのがいいよ、これがいいよ」という実践哲学みたいなものでしょ。それ式なんです。だけど、そうすると理論的に言っているヨーロッパの人たちと同じことによく会うんですね。

吉川 それは俗っぽくいえば、先入観を持たないから見えてくるのだと思います。スポーツ人類学会を合同で台湾で開いた時、キーノート・スピーカーが「予備調査が重要だ」とおっしゃったんですが、私は前もって予備調査をしてはいけないと思っているんですね。動作を見る時、これをどう考えるかというのは、その時の命がけの勝負だと思えます。

先生のことばを伺っていると、常識的には、枕詞は修飾語だし、韻律を整える効果があるというような話で終わってしまいますが、虚心坦懐に受けとめられて、同格のことばだということを見えられたのではないかと思います。

中西 山上憶良はいわゆる枕詞を使うのが非常に少ないんですよ。一番多いのは人麻呂です。非常にリゴラスな人とエモーショナルな人と、はっきりと分かれる。エモーショナルな人は枕詞をいっぱい使う。そういう二つを見ましても、枕詞がどういうものかということとはよくわかりますね。

レトリックよりも身体言語

中西 諸悪の根源は、今日的な見方から

見ることなんですよ。すべての学問はそうだと思いますけど。その見方は、詩学においては、レトリックが最高なんです。たった一つと信じて疑わないかもしれない。

「字余り」なんていうでしょう。先生方からいうと、字余りなんてとんでもないでしょう。字で書くから余るのであって、しゃべれば6音じゃなく、ちゃんと5音なんです。8音でもなく7音ですよ。それなのに、これは字余りだ、字足らずだという。伸ばしたり縮めたりすれば、字足らず・字余りなんてありえないんだから。まったく無自覚に使われてますね。

それからもう一つ、漢詩なんかで「倒叙」だという。「酒を温めて紅葉を焚く」というのは反対なんだという。紅葉をまず焚く、それから酒を温めると。それを酒を温めて紅葉を焚くというのは倒叙だといって、これもレトリックだとして理解するんですね。

我々は紅葉を焚こうかということから始まるのではないでしょう。あっ、酒の癪をしたいなと思うんでしょう。じゃあ酒を温める方が先じゃないですか。で、「紅葉を焚く」と。

これを「身体言語」と僕は名付けていますが、身体言語とこそ言うべきであって、倒叙法だなんていうレトリックの一つとして理解する。そういう誤解がいっぱいありますね、今の学問の中には。

吉川 先生は『日本人とは何か』という御本で、「日本人はもうこのへんで欧米人の真似をするのをやめて日本人らしく生きるべきだ」とか、「西洋の学問の方法で日本の文化は切れない」と言っておられますが、郡司正勝先生も「肉

体と象徴」という論文で、要するに、舞踊を西洋の概念で分析するのは、日本の舞踊はわからないと書かれたのだと思います。

その中で、日本における身体と魂について考察されましたが、私は中西先生の御本を拝見していて、魂というものを「身」ということばで端的に表しておられるのが、より素晴らしいと思ったんですね。「身から出た錆」とかを例にされて。

日本人の魂を論理的に考えた場合、いろいろと考えさせられます。たとえば、瀬戸内海地方には初盆を迎えた人の位牌を背負う盆踊りがありますが、近親者がその位牌を背負って踊っているのを見ると、死者の魂が背負われているように思われますが、「身」という方がその魂が生きている人の身体についているような感じがします。「魂」というと身体と少し離れているような感じがして。

中西 はいはい。やっぱり、そういう点では、非常に具体的なんじゃないでしょうかね。それから、もう一つおっしゃった、西洋の概念では切れないという時、私はいつも思うんですけど、ヨーロッパと今考えているものが、産業革命以降のヨーロッパでしかないんですね。その前の中世ヨーロッパはまったく無視されている。その上の古代ヨーロッパにはギリシャを借りてくるわけですねえ。

こうした時代のものなんかは近代、100年か150年ぐらいの間のヨーロッパとまったく違うものですね。ですからヨーロッパ人だって何か危機が訪れると、いつも古代とか中世とか、ワーグナーだって何だってみんな憧れます

でしょう。ついこの間までは守っていたんだけど、自然科学のものすごい発達の中で、これだけが世界の孤児になったんですね。あとは世界中みんな同じ。そういうことだと思いますね。

吉川 それから先生のご発表の仕方のことですが、シンポジウム形式のような『万葉集を学ぶ人のために』では、分担執筆はあまりにも専門的になりすぎるし、一人ずつではなく、その場において、話しことばでするのが良いとされていますね。

郡司正勝先生や戸井田道三先生は、日本の男のことばは誤魔化しがいっぱいあると言われたのですね。女ことばはまあいいだろうというのがお二人の考えですが、私はそれは話しことばに近いからだと思うんです。郡司先生は「本に書く時にはいろいろ整理して書くが、しゃべっている時には本当のことが話されているんだ」とおっしゃってました。中西先生の発表の仕方でも、そういうお考えからシンポジウムをやっておられることに敬服したんです。

中西 言語というものは相対的なものでしょう。話者がいて対者がいるから言語は成り立つので、文字なんていうものは車の両輪のうちの片方でしかない、ものすごく不健康なものですよ。不完全というか、きわめて特殊な言語ですもの。しゃべっている時が本当の言語ですから。絶対その方がいいですよ。

日本文化から世界を考える

吉川 先生のことを、芳賀徹先生は「純然たる国際派の日本国文学者」と紹介されていますが、ご専門についてお伺

いしたいと存じます。郡司正勝先生は、「専門の分野は他人が決めるものだ」と言っておられましたが、先生の考察の分野はきわめて広いと思います。古代学、日本精神史なども御本の中では紹介されていましたが、そのあたりに日本の独自性があり、日本で人類が発生したわけではないですから、全世界的な普遍性を考える鍵があるのでしょうか。

日本伝統音楽研究センターが扱っている日本伝統音楽にも外国から来ているものもずいぶんあるわけですね。前所長の廣瀬先生は、日本の文化を深く理解しなければ、ヨーロッパの文化も深くは理解できないとおっしゃっておられました。日本にある文化はシルクロードの終着点みたいなもので、吹きだまっていて、よそでは失われたものが残されている可能性があるわけですね。少なくとも考古学の資料は中国などとは比べものになりませんが、身体に関するものの資料は膨大にあると思うんです。

本田安次先生は「民俗芸能は舞踊学に資することができる」とおっしゃっておられますが、ドイツのピナ・パウシュという舞踊家の先端的な仕事である『山の上で叫び声が聞こえた』を見た時、本当にそうだと思いました。音楽を止めている時にダンサーが動いたり、動いている時に音楽を止めたりする。これまでの西洋の舞踊は、音楽と舞踊の動作とが合理的に結びついているのに、こんなに二つの要素を不自然に組み合わせているのを見ると、ピナはそれぞれのダンサーに「あなたはなんで動くんですか」と質問をしているように思いました。

日本の伝統的な舞踊の表現の基盤となっている、宗教的な儀礼の中でおこる神がかりは、ことばや音楽によって動機づけられておこるものですが、その動作は「する」というものではなく、動機づけられて「なる」結果として、舞踊的表現をするのです。最先端に行けば、周回遅れかもしれませんが、日本のものが意外に役に立つ資料になるのではないかと思います。

中西 そうそう。そうそう。

吉川 こういう点で、日本伝統音楽研究センターが音楽と芸能の面から日本の社会に根ざす伝統文化を考えるとところに特化しているのは、人間にとって音楽とは何か、舞踊とは何かを考えると、文学の分野は先生もずいぶんいろんなことを明らかにされたんですが、日本の伝統芸能では、どこまでが芸能なのかということすら未確定です。特に芸術であるとか、美とかいう問題になると、多くの人には芸能なんてつまらないものだと思う先入観すらあると思います。

先生はもちろん研究の歴史を踏まえて、伝統のある国文学を研究されていますが、日本の伝統音楽では東京大学に田辺尚雄先生が昭和5年に日本音楽史の講座を開設されて、第一回目の聴講生に吉川英史がいました。その弟子の小泉文夫先生は日本の芸術音楽を理解しようとするうちに、ストレートには追求できないから周辺諸国の音楽のフィールドワークをして、比較音楽学、民族音楽学の方に進まれました。田辺先生も吉川英史も小泉先生も皆、西洋音楽から入ってきたので

す。私は子供の時、昭和 24 年に父親の吉川英史に引き取られ、東京にいた名人の演奏はほとんど聴かせていただきましたが、「面白い」と言うのと、「好き嫌いを言っていると学者にはなれない」と言われたものでした。

どこまでを日本の伝統音楽として研究の対象と考えるかは簡単ではありません。そうしたものは、分離された純音楽としては存在していなくて、芸能の中にあっさりしますから。その複合的なものを調べていくのに、京都にセンターがある意味がわかりはじめました。

地域社会で伝承してきた伝統音楽や芸能はとても多様性があって、太鼓一つをとっても、同じ京都の六斎念仏でも嵯峨と千本のは同じじゃないんですね。そういう違いで成り立っているのだから、伝統音楽を研究する機関を京都においてもらったことは、廣瀬前所長も私も、大正解ではないかと思っています。

比較の概念を持つ伝統

中西 伝統という時、よく誤解するのですが、伝統は比較の概念ですよ。ところがそれをまったく、非比較という意味で使いませんか？ これはもう固有のものなんだと言っているが、固有かどうかは比較してみないとわからないわけだから。伝統論者は極めて長けた比較論者ですよ。そういう点を考えますと、多から一を選ぶ、多を常に持っているという考え方は大事な考えですよ。

しかも、伝統であるのか、非伝統であるのかということは、これは都のコンセプトですね。田舎は都で固定され

たものが広がっていくだけの話ですから。ところが、都というのは常に最先端の文化と接触をするところですよ。

新しいものが入ってきたら、ご承知のように、古代はまず皇太子に外国人をつけて教育をした。現代のヴァイニング夫人もそうですよ。皇太子の外人家庭教師というのは連綿として 1500 年くらいの歴史がある。反対に、田舎の人には家庭教師はいないんですよ。常に比較を強いられている人間は都の人間です。それに強いられた結果、これは伝統である、これは非伝統であるという認識に至る。

京都でなぜ伝統音楽かという時には、ただここに伝統が守られているからというのではないですよ。常に比較の目を通しながら、荒々しく生きてきた、そういう歴史はまさに文化首都であった歴史なんですよ。だから京都だというふうには考えないといけなくて、他の人たちは数歩手前のところで、「京都は昔からあるから」なんて言うわけですよ。そうじゃないですね。

吉川 今のお話の、その荒々しく戦って、葛藤の中で、伝統が残っていくんだというところを忘れてはいけないのだと思うんです。日本音楽は、西洋音楽と比べた場合、和音とかはない。しかし、その何かがないと、欠けているとか不十分とか、すぐそういうふうにするのは間違っていると思います。

ハーモニーはないが、その代わりに、平井澄子さんに三味線を習った時に、一つのフレーズから次のフレーズに移る時に、「気持ちを変えて」と言われたんです。気持ちを変えるのは、上に伸ばしかかるのではないかと思うのですが、

たとえば日本の伝統音楽の要素といった場合、何がハーモニーにあたる要素か考えてもいないんですね。

私の専門は、ことばや音楽に動機づけられておこる身体の変化としての舞踊につながる身体の動きですが、舞踊よりは音楽が先行して研究が進んでいますから、音楽のメロディにあたるものは何かとか、ハーモニーにあたるものは何かを考えてみる必要はあると思います。しかし、それはうまく探せないままですが、そういうことを絶えず思っているんですね。

「真手」と「片手」という話がありますが、日本人も、不十分という意識には敏感なんですか？

中西 いやいや、私は、不十分というのは、ある二つのものがいいという考えの中で初めて起こってくる、「真手」も「片手」もそうだと思います。で、中国人は二者の存在において完結すると考えるでしょう。必ず壇には両方に花がありますよ。日本は片方だけでしょう。中国人にはものすごく不自然みたいですね。

私は先生のおっしゃった「伸しかかる」という話はね、「重ねの思考」という題で文章を書いたことがあります。日本語では、「の」という助詞をやたらに使う。ofもforもonもinもみんな「の」です。それを区別しないで、次々と、何とかの何とかの何とかの、と重ねていただけなんですよね。

だから、対立がない。ですから弁証法なんていうものは日本ではふさわしくないですねえ。対比させられる、カドの思考ではなくて、線思考なんですね。

吉川 そうですね。先生のその「の」の問題とか、あるいは主語の問題とか、

まだいろいろお聞きしたいことはいっぱいありますが、また次の機会に改めてと思います。

中西 そうですね。

吉川 長い時間、貴重な時間をいただきまして、どうもありがとうございました。

中西 ありがとうございました。ものすごく楽しい時間でした。

エッセイ

山・鉾・屋台の祭りの
囃子をめぐる新しい動き

田井 竜一

山・鉾・屋台の祭りの囃子を調査研究の中心にすえるようになってから、少なからずの時間が経過した。この分野の研究は遅れており、基礎的なデータが非常に少ないので、まずはそれをつみあげていくことから開始したのである（本報創刊号拙稿参照）。現在でも基本的には同様の方針ですすめているが、最近になって、当初はあまり気にとめていなかった事柄に関心をもつようになった。それは、山・鉾・屋台の囃子をめぐって、現在進行形ですすんでいるいくつかの新しい動きである。

その一つは、担い手の中に、従来には無い新しいタイプのグループないしは運動が誕生してきていることである。山・鉾・屋台の祭りの囃子は、特定の地域社会・担い手・機会によってはやされるものであり、秘儀的なものとされて、部外者には秘匿されるのが通常である。ところが、私がこのところ調査研究をおこなってきた水口曳山囃子（旧水口町・現在甲賀市）においては、そうした基本姿勢は保持しながらも、ある一人の指導者によって、担い手自身が外の世界にむかっていく、ないしは外側から部外者をむかえ入れるという戦略がとられることとなった。その結果水口曳山囃子は、多くの

人々にしられ、受容されるものへとになっていくという現象がおきている。

囃子の名手であったその人物、鷓飼眞五氏は、「水口の囃子ぜひ世の中にひろめよう」という強い信念のもとに、囃子になっている各町内を横断するような形で、囃子のエキスパート達をあつめて、「水口ばやし八妙会」という団体を結成した。そして、各地の様々な機会ですすめられたものであった。その結果、祭礼の場には全国からいわば水口囃子シンパ（囃子手・愛好家）が集結し、熱い視線と声援をおくるとい、山・鉾・屋台の祭礼としては極めて珍しい光景が展開することとなったのである。

このように、鷓飼氏による「水口囃子」をひろめようという運動は、可能な限りどこへでもかけて囃子をはやす、また「くる者こばまず」で、ならいたい人にはよるこんで囃子をおしえる、という2つの戦略によってすすめられたものであった。その結果、祭礼の場には全国からいわば水口囃子シンパ（囃子手・愛好家）が集結し、熱い視線と声援をおくるとい、山・鉾・屋台の祭礼としては極めて珍しい光景が展開することとなったのである。

このような活動はまた、従来の各町内における水口曳山囃子自体にも少なからず影響をあたえることとなった。その一つに、八妙会の人々が研鑽をつんで切磋琢磨した結果、いわば「八妙会版」とも

いうべき囃子がうまれたことがある。そして、町内の囃子においていわば伝承力がよわまった時、それがそこに浸透し、場合によっては従来のものにとってかわるといった現象もあらわれている。こうしたことは、会の人々が元々意図していなかったことであり、この辺りにこのような新しいグループ・運度のジレンマがあるといえよう（水口の事例の詳細については、当センターの共同研究会の研究成果をとりまとめた近刊書、植木行宣、田井竜一編『都市の祭礼 山・鉦・屋台と囃子』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究叢書1、東京、岩田書院所収の拙稿を参照されたい）。

水口曳山囃子にみられるこのような新たな動きは、類稀な指導者の資質によるところも大きいとかがえられるが、同時にそれと類似の動きは現在日本各地の山・鉦・屋台の祭りでおきている、あるいはおきつつある。こうした、従来の文脈から自由な形での活動の興隆は、大変興味深い現象といえよう。

もう一つの新たな動きとは、現在様々な所でおこなわれている、「囃子大会」や「囃子コンクール」の存在である。たとえば、私が近年調査研究に従事している石取祭り（桑名市）では、その前夜祭的な行事として、「石取祭ばやし優勝大会」が毎年開催されている。現在は、子供の部・女子の部・一般の部の3部門にわかれ、全部で30以上のチームが参加する盛況振りである。こうした催しは、囃子の担い手、特に子供達や若い人達を囃子にひきつけ、ひいては囃子の伝承を活性化することに大いに

貢献しているといえよう。

一方で、このようなコンクールは、囃子の伝承にはからずも制約をもうける役割をはたすことにもなっている。石取祭りのコンクールでは、1チーム3分間の持ち時間があり、技能・音量・態度の3つの要素が採点の基準である（「音量」という項目があるのを不思議におもわれるかもしれないが、石取祭りの囃子は、日本一音量の大きな囃子として有名である）。そのため、町内間の競い合いにかつべく、短い時間でより人目をひく、テンポが速く切れ味のよいパフォーマンスが追求されがちとなる。事実、囃子の練習期間（ならし）においては、各町内のコンクールに出場するチームは、いわば「町内版」とは別の「コンクール版」の囃子を練習しているのである。

またかつては、各町内には特有の囃子の打ち方があり、さらにブチ（バチ）で太鼓の鉦のところを部分的にうつケレンなどの装飾的な替え手を多くをおりこんでいくのが、名人芸とされていた。ところが、これらはコンクールの採点基準にははいていないので、評価されないどころか、場合によっては間違っただけとして減点されてしまうのである！ こうして、コンクールが度かさなるにつれて、こうした特色ある技法はやりがいのないものとして、次第におこなわれなくなっていく。その結果、特に若い人々にとって、それらは未知のものとなってしまったのである。また、水口曳山囃子と同様に、「コンクール版」の囃子のスタイルが各町内の囃子（特に子供達の囃子）にも

影響をあたえるようになり、囃子が画一化する傾向もうまれている。

石取祭りにおける事例は、新たに導入された「囃子コンクール」という制度に対して、囃子の多様性をいかに共存させていくかという問題を提出しているともわれる。そして、今までのべてきた二つの事例に共通してうかびあがってくるのは、新旧のシステムの間で、囃子をめぐる様々な事柄をどのような形でうまくバランスをとっていかかという、現実的な課題である。

山・鉾・屋台の祭りとその囃子は現代にいきているものであり、その伝承においては様々な課題があり、かつ多様な試みがなされている。ここでとりあげたのは、その一部にすぎない。山・鉾・屋台の囃子の調査研究においては、基礎的なデータを収集すると共に、こうした事柄にも目をむけ、担い手と共にその伝承のあり方についてかんがえるという指向がもとめられているといえよう。

センターニュース

(2004.01.01 ~ 2005.03.31)

人事・採用及び異動発令

平成 16 年 3 月 31 日
所長 廣瀬量平 (任期満了)
教授 吉川周平 (定年退職)
助教授 スティーヴン・G・ネルソン
(法政大学への転出により退職)
非常勤講師 (特別研究員) 小川加代子 (任期満了)
非常勤講師 (特別研究員) 山田智恵子 (任期満了)
司書 井口はる菜 (退職)
研究補助員 川和田晶子 (退職)
平成 16 年 4 月 1 日
所長 吉川周平 (新任)
教授 後藤静夫 (新規採用)
助教授 竹内有一 (新規採用)
非常勤講師 (特別研究員) 告井幸男 (継続採用)
非常勤講師 (特別研究員) 廣井榮子 (新規採用)
非常勤講師 (特別研究員) 三木俊治 (新規採用)
非常勤講師 (特別研究員) 森田柗山 (新規採用)
非常勤講師 (情報管理員) 東正子 (継続採用)
学芸員 川和田晶子 (新規採用)
研究補助員 池内美絵 (新規採用)
研究補助員 伊藤志野 (継続採用)
研究補助員 光本健吾 (継続採用)
平成 17 年 3 月 31 日
助教授 高橋美都 (同志社大学への転出により退職)

特別研究員 告井幸男 (任期満了)
研究補助員 光本健吾 (任期満了)
事務長 旭 昭治 (退職)

客員研究員の受け入れ

平成 16 年 8 月 1 日 ~ 平成 17 年 5 月 31 日
客員研究員 Dr.Philip Flavin (カリフォルニア大学バークリー校 ポストドクター)
受入研究室: 久保田研究室
テーマ「江戸期の当道に所属する音楽家の身分と、地歌作物における諧謔性との関係についての歴史的・社会的研究」
フレーヴィン氏は、日本学術振興会外国人特別研究員制度により、平成 15 年 8 月 1 日 ~ 平成 16 年 7 月 31 日の一年間の予定でネルソン研究室に受け入れられていたが、上記の期間延長が認められた。ネルソンの退職に伴い、平成 16 年 4 月からは、久保田研究室が受入研究室となった。

大学・センターの出版物

< 学術刊行物 >

『日本伝統音楽研究』第1号 日本伝統音楽研究センター研究紀要

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2004年3月31日、B5 2段組縦書き・横書き 260pp. (別冊 192pp.)

内容: 西島安則「伝統の宇宙へ 『日本伝統音楽研究』刊行を祝って」、廣瀬量平「『日本伝統音楽研究』発刊にあたって」

論文 磯水絵「『日本三代実録』巻頭について 「童謡」考」、遠藤徹「壹越調に混在する二つの調」、告井幸男

「和邇部大田麿考」、山田智恵子「義太夫節地合における変形可能性 同一曲における演奏者による変形可能性」

研究ノート 青木洋志「『類箏治要』所引漢籍の出典について」、井口はる菜「「橋の下」の句を持つ履物隠し歌の変遷」、森田柁山「三曲合奏における尺八手付けの特徴 主に都山流の場合」、和田一久「和琴前史」、和田一久「トビノヲゴト考」

調査報告 田井竜一・増田雄「京都祇園祭り 鶏鉦の囃子」

史料翻刻および解説 中原香苗「宮内庁書陵部蔵〔羅陵王舞譜〕 解題と翻刻」

開所記念シンポジウム記録 小島美子・前田昭雄・井上章一・廣瀬量平「今、なぜ日本伝統音楽か」

資料 廣瀬量平「現代邦楽放送年表」について（別冊）長廣比登志「現代邦楽放送年表 NHK ラジオ番組「現代の日本音楽」放送記録（64.4～72.3）」

『日本伝統音楽研究』第2号 日本伝統音楽研究センター研究紀要

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2005年3月31日、B5 2段組縦書き・横書き 110pp.

内容：論文 岡田万里子「上方唄」と「江戸歌」 三味線音楽の呼称の変遷が意味するもの、小川佳世子「能《融》と応永の詩画軸 『柴門新月図』をめぐって」、久保田敏子「地歌・箏曲における弄斎物」、告井幸男「雅楽の楽と近衛の楽 音楽史と政治史の交わり」

研究ノート 竹内有一「豊後三流の曲節譜（一） 研究の序説と資料」

調査報告 田井竜一・増田雄「京

都祇園祭り 菊水鉦の囃子」

資料 川和田晶子「西村遠里著『雨中問答』中の十二調子に関する記述から 江戸中期の天文暦算学者による音律研究」

『邦楽歌詞研究』三味線組歌 中組・奥組』日本伝統音楽資料集成 第3巻

編集代表者：久保田敏子、2004年3月31日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、A4 2段組縦書き 134pp.

内容：中組について、早舟、八幡、乱後夜、御簾、揺上、名吉、弄斎、奥組について、七つ子、浅黄、茶碗、松虫、晴嵐、堺、中島、細り

執筆担当者：井口はる菜、小野恭靖、久保田敏子、佐々木聖佳、鈴木由喜子、永池健二、西川学、野川美穂子、真鍋昌弘、山根陸宏

（平成15年度の共同研究「邦楽歌詞研究」地歌・箏曲」の成果）

『日本三代実録音楽年表』日本伝統音楽資料集成 第4巻

編集代表者：ステイーヴン・G・ネルソン、編集：「琴・箏の系譜 楽器、文献と奏法」研究会、2004年3月31日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、A4 横書き 398pp.

（平成15年度までの共同研究「琴・箏の系譜 楽器、文献と奏法」の成果）

『四天王寺聖霊会舞楽・能生町白山神社舞楽・遠江国一宮小國神社古式舞楽における太平楽（泰平楽）の三者比較』

日本伝統音楽資料集成 第5巻

編集代表者：高橋美都、2005年3月31

日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、A4 横書き 付属CD1枚 116pp.

内容： 研究の目的と位置づけ、共同研究者、研究の経過、研究の対象と範囲、手順と方法、対象とした舞楽映像、構造分析、聞き取り調査、成果と課題、映像資料(付属CD)
(平成15～16年度の共同研究「寺社の祭祀に関わる舞楽の伝承研究」の成果)

< 広報誌等 >

『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報』第3・4合併号 2004年3月31日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、A5 52pp.

『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報』第5号 2004年11月30日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、A5 42pp.

『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報』第6号 2005年3月31日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、A5 62pp.

『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要2004』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、B4 変形観音折(所報第5号・第6号の巻末に書式を改めて再録)

Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts, 2004 (上記概要の英語版) 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、B4 変形観音折(所報第5号・第6号の巻末に書式を改めて再録)

『京都市立芸術大学 概要2004』京都市立芸術大学発行、58pp. (日本伝統音楽研究センターの概要記事 pp.47-49)

『芸大通信』Vol.002 2004年6月、京都市立芸術大学全学広報委員会発行 8pp. (日本伝統音楽研究センター初代所長 廣瀬量平「音楽・人間・ルーツ」p.3)

『芸大通信』Vol.003 2005年2月、京都市立芸術大学全学広報委員会発行 8pp. (日本伝統音楽研究センター教員の紹介：後藤静夫「現場からの風」、竹内有一「『伝統』のスズメ!?」p.7)

大学・センターの一般公開事業

< 研究センター公開講座 >

平成15年度第1回公開講座

「日本の伝統音楽とその発展 十三絃箏から二十五絃箏まで」(廣瀬量平所長退任記念)

日時：平成16年1月28日(水)午後7時～9時

場所：京都コンサートホール 小ホール
内容：

1. 講演 廣瀬量平「日本の伝統音楽とその発展」
2. 演奏と話 「瓊 箏独奏のための十段」(十三絃箏) 古典「みだれ」(十三絃箏)「<みだれ>による変容」(二十五絃箏)「浮舟 水激る宇治の川辺に」(二十五絃箏) 以上、廣瀬量平作曲・野坂恵子演奏
(所報第5号に、廣瀬所長の略歴・邦楽器および邦楽器を含む作品一覧・当日のプログラムノートを掲載)

平成15年度第2回公開講座

「日本伝統音楽の現在 講演と二十五絃箏の演奏」(廣瀬量平所長退任記念)

日時：平成16年1月29日(木)午後2時30分～4時

場所：京都市立芸術大学 大会館ホール

内容：

1. 講演 廣瀬量平「日本の伝統音楽の現在」
2. 対談 廣瀬量平・野坂恵子
3. 演奏 「浮舟 水激る宇治の川辺に」(二十五絃箏) 廣瀬量平作曲・野坂恵子演奏
(所報第5号に、講演の記録を掲載)

平成15年度第3回公開講座

「日本の伝統的な音楽と身体動作から読みとられるもの カミとホトケをめぐって」

日時：平成16年2月7日(土)午後2時30分～4時15分

場所：キャンパスプラザ京都 5階第1講義室

内容：講演 吉川周平

主旨：日本の伝統音楽には、芸術音楽ばかりではなく、多種多様で魅力的な民俗音楽がある。わが国の民族音楽学の第一人者だった小泉文夫(1927～83)は、日本の伝統音楽を理解するためには、芸術音楽の基盤をなす民謡と、さらにその基盤をなすわらべ歌の研究が不可欠であることを実証した。民謡も民俗音楽のひとつだが、日本の民俗音楽の多くは、各地で行なわれる祭りで演じられている民俗芸能の重要な要素として、伝承されている。小泉文夫は、それまでの日本の伝統音楽の研究が、歌詞などの音楽外の要素の研究に重きを置いてきたのに対し、ドイツの音楽学者メルスマンなどの西洋の音楽学の方法論を役立てて、音そのものを対象とした研究を進めることに成功

した。その個人的な指導を受けた私は、民俗芸能の主要な要素である身体動作に焦点を当て、身体のカミとホトケそのものを対象とした研究の可能性を探ってきた。

日本の民俗芸能の中で、もっとも複雑なものは神楽であり、もっとも単純に見えるものが盆踊りである。瀬戸内海の島々には、初盆の人の位牌を背負って踊る盆踊りがある。これは初盆を迎えた死者の霊の葬送、聖なるものへの再生の儀礼と考えられる。神楽もこうした霊を視点として考える場合、その主要な目的は、自分たちの運命に関する神の出現であり、その神霊を背負って舞うことが、神出現の具体的な表現であり、神アソビと解される。日本の伝統音楽の固有の美の魅力に触れながら、下記のような事例によって、神楽や盆踊りなどの宗教的な儀礼に見られる身体動作のかたちから読みとられるものを検討し、フィールドにおけるカミとホトケについて考えてみることは意味があろう。

紹介事例

- ・今井慶松(1871-1947)『新さらし』
- ・『高砂』祝言之式
- ・香川県坂出市与島の盆踊り
- ・大分県東国東郡姫島の盆踊り
- ・大元神楽『天蓋』(神がかり)、『綱貫』、『御綱祭り』(島根県邑智郡桜江町)：1981年記録保存のための小田での臨時上演、1967年八戸での式年祭
- ・鹿児島県奄美大島のユタの神まつり
- ・イザイホーにおける神がかり的表現：1978年の最後のイザイホー、1967年のイザイホー
- ・宮崎県西都市銀鏡の神楽

・宮崎県東臼杵郡椎葉村向山日当の神楽

平成16年度第1回公開講座

「2時間でわかる世界遺産・文楽 実演を交えて」

日時：平成16年10月27日（水）午後
4時30分～6時30分

場所：京都市立芸術大学 講堂

内容：

1. 文楽概説 後藤静夫
2. 解説と実演 義太夫節について（「義経千本桜・道行初音旅」「傾城反魂香・土佐将監閑居の段」より） 司会：後藤静夫、太夫：竹本津駒大夫、三味線：竹澤団吾
3. 同「人形三人遣いについて」 吉田和生・吉田和右・吉田玉勢
4. まとめ（「新版歌祭文・野崎村の段」よりお染のクドキ）

主旨：平成15年11月、ユネスコの「人類の口承及び無形遺産の傑作（世界遺産）」の宣言を受け、改めて注目されている人形浄瑠璃「文楽」の高度な芸術性を、文楽の中堅・若手の現役技芸員（太夫・三味線・人形）の実演を交え、その芸の内容及び習得等を総合的かつ平易に解説し、文楽の理解を深めてもらう。

反響：（『京都新聞』2004年11月9日朝刊より）

「関西文化の熱感じた2時間」 横浜市・伊藤清美氏（フリーライター・48）先月末、京都市立芸術大学で開かれた「2時間で分かる世界遺産・文楽」公開講座に参加して、とても分かりやすい内容に驚いた。

何しろ、世界無形文化遺産の文楽だ。三百年もの歴史、そして太夫、三味

線、人形遣いからなる三業の芸能。難しさが先に浮かんでしまうが、二時間は、見事にそれを吹き飛ばし、現代へとぐっと接近させた。

文楽座の演者たちは、それぞれの芸のウラまでおおらかに公表し、制作経験のある司会者は観客の立場になって掘り下げた解説を行い、また文楽研究の鋭い視点から、演者へ質問を投げかけた。ほぼ満員の聴講者は、学生、外国人、日本人女性が大半で、居眠りをすることもなく熱い視線で文楽を分かろうとしていた。

洛西の地で体験したこの二時間は、文化の発祥の関西ならではの、いきいきとしたエネルギーを感じさせてくれた。今後の講座に期待している。

平成16年度第2回公開講座

「知られざる中尾都山の魅力 五十回忌追善レクチャー・コンサート」

日時：平成17年1月22日（土）午後
2時～4時

場所：京都芸術センター 講堂

解説・司会：久保田敏子

演奏・話：森田柁山（日本伝統音楽研究センター特別研究員・都山流尺八演奏者）

助演：友淵のりえ（正派邦楽会大師範）・藤田天山（都山流尺八演奏者）

曲目：「紫禮法」古管による復原演奏、「懐月調」初段 古管と現在の尺八との比較演奏、「青海波」都山流隆盛の基となった本曲、「鶴の巢籠」初演時の三弦地入りと現行の比較演奏

主旨：本年は、明治29年に尺八の一大流派である都山流を創始し、一代で琴古流と並ぶ流派に育てた中尾都山

(1876 ~ 1956)の五十回忌に当たる。その追善として、余り知られていない都山の青年期、特に虚無僧修行時代について、都山の残した古典本曲の直筆楽譜を、最後の明暗流虚無僧であった勝浦正山師から寄贈された楽譜と比較研究し、正山師遺愛の古管尺八で再現演奏することによって、都山の初期作品についても、その魅力を検証する。
(詳細は、本号の森田研究員による研究報告を参照)

平成 16 年度第 3 回公開講座

「和楽器のルーツをたずねて 中央アジアの楽器と音楽」

日時：平成 17 年 3 月 19 日(土)午後 2 時 ~ 4 時

場所：京都市立芸術大学 大学会館ホール
講師：三木俊治(日本伝統音楽研究センター特別研究員)

実演協力：アンサンブル「ドーラン」
大森秀則(音楽文化総合研究所欧州研究部)、三木理恵(同研究所歌謡研究部)、高橋直己(同研究所中央アジア研究部)

内容：

1. 講演 中央アジアの民族・音楽・楽器
2. 実演 カザフスタンの楽器と音楽
カザフの国民的な撥弦楽器ドンブラ、日本で初めて紹介されるシャーマンの擦弦楽器コブズによるシャーマン儀礼の音楽など / 演目「トルクメン・キュイ」
3. 実演 キルギスの楽器と音楽 倍音でメロディーを演奏する高度な体鳴楽器口琴や、三弦の撥弦楽器コムズなど / 演目「コムズ独奏」

4. 実演 中国・新疆オアシス都市の楽器と音楽 美しいデザインのウイグル族の楽器ドータル、ギジャックなど / 演目「カンバルハン」「ドーラン民謡」
主旨：和楽器のルーツは色々な国にあるが、特に中央アジアや東アジアにあるといわれている。今回は、中央アジアの楽器と音楽にスポットを当て、本邦初演の音楽を含む最新の情報を中心に紹介する。「日本と大陸とのつながり」に受講者と共に思いを馳せてみたい。演奏に使用した実際の楽器に触れてもらう時間も設ける。

プロジェクト研究・共同研究の報告

<プロジェクト研究>

「民俗芸能における神楽の諸相」(平成15年度)

研究代表者: 吉川周平

共同研究員: 植木行宣(京都学園大学教授)、片岡康子(お茶の水女子大学教授)、小島美子(国立歴史民俗博物館名誉教授)、茂木栄(国学院大学助教授)、星野紘(元東京国立文化財研究所芸能部長)、松永建(元九州芸術工科大学教授)、松原武実(鹿児島国際大学短期大学部教授)、三村泰臣(広島工業大学教授)、宮田繁幸(東京国立文化財研究所芸能部民俗芸能室長)、和田修(早稲田大学助教授)、渡辺伸夫(昭和女子大学教授)

神楽は日本の宗教的な儀礼のなかで、もっとも長い歴史を持つものとされ、重要なものである。古くから宮廷の中で行われてきた御神楽(みかぐら)のほかに、日本各地に伝承されている民俗芸能の神楽がある。民俗芸能の神楽は、音楽や舞踊の多種多様な形を伝承している点で、貴重な文化遺産である。

ところが、民俗芸能の神楽は伝承されている箇所が非常に多いうえに、近年は行われている日が土曜日・日曜日に移行することが多く、ひとりの研究者では実際に見ることは不可能である。そこで、本プロジェクト研究では、日本各地の神楽のフィールドワークをして、映像記録を作成している研究者と、舞踊の研究者が集まって、各地域の神

楽の特徴を追及し、その音楽や舞踊等の特質を比較検討する。

平成15年度は、第1回研究会を2003年7月26日(土)、27日(日)に実施(その詳細は所報第3・4合併号21ページを参照されたい)した後、次のように第2回から第5回までを実施した。

*第2回研究会

2004年3月6日(土)、7日(日)、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1(以下第5回まで同じ)(1)三村泰臣「中国地方の神楽概説ならびに、中国山地の神楽」、(2)三村泰臣「環瀬戸内海の神楽」、(3)渡辺伸夫「『宿借り』をめぐって」、(4)三村泰臣「その他の中国山地の神楽」、(5)討論「神楽研究の課題」、司会・進行: 吉川周平

*第3回研究会

2004年3月18日(木)、19日(金)、20日(土)(1)萩原秀三郎(民俗写真家、ゲストスピーカー)「タマシイの強化安定 神楽の目的」、(2)三村泰臣「將軍舞をめぐって」、(3)茂木栄「九州の神楽」、(4)松永建「宮崎県の平野部の神楽」、(5)松永建「宮崎県の平野部の神楽」、司会・進行: 吉川周平

*第4回研究会

2004年3月24日(水)、25日(木)(1)萩原秀三郎「ご幣の起源と神の来臨」、(2)宮田繁幸「神楽の文化財指定 三作神楽をめぐって」、(3)入江宣子(仁愛女子短期大学非常勤講師、ゲストスピーカー)「越前の神楽について」、(4)樋口昭(埼玉大学教授、ゲストスピーカー)「比婆荒神神楽の音楽」、(5)門屋光昭(盛岡大学文学部長、ゲストスピーカー)「東北の修験系の神楽につ

いて」(6)伊野義博(新潟大学教授、ゲストスピーカー)「新潟県の神楽 諸相と変容」司会・進行:吉川周平

★第5回研究会

2004年3月28日(日) 29日(月) 30日(火) (1)萩原秀三郎「依り代と依り巫し」(2)梅野光興(高知県立歴史民俗資料館主任学芸員、ゲストスピーカー)「いざなぎ流神楽をめぐって」(3)星野紘「ユーラシアの神楽周辺芸能事例 韓国・中国・ロシア」(4)小島美子「神楽の音楽と舞の諸問題」(5)総合討論、司会・進行:吉川周平

「民俗芸能における神楽の諸相」(平成16年度)

研究代表者:吉川周平

共同研究員:植木行宣(元京都学園大学教授)、梅野光興(高知県立歴史民俗資料館主任学芸員)、片岡康子(お茶の水女子大学教授)、門屋光昭(盛岡大学文学部長)、小島美子(国立歴史民俗博物館名誉教授)、茂木栄(国学院大学助教授)、星野紘(元東京国立文化財研究所芸能部長)、松永建(元九州芸術工科大学教授)、松原武実(鹿児島国際大学短期大学部教授)、三村泰臣(広島工業大学教授)、宮田繁幸(東京国立文化財研究所芸能部民俗芸能室長)、渡辺伸夫(昭和女子大学教授)

「教育現場と日本音楽」(平成16年度)

研究代表者:久保田敏子

共同研究員:井口はる菜(滋賀大学非常勤講師)、伊野義博(新潟大学教授)、加藤富美子(東京学芸大学教授・附属幼稚園長)、澤田篤子(洗足学園音

楽大学教授)、薦田治子(武蔵野音楽大学教授)、田井竜一、竹内有一、月溪恒子(大阪芸術大学教授)、永原恵三(お茶の水女子大学教授)、樋口昭(創造学園大学教授)、藤田隆則(大阪国際大学助教授)、水野信男(兵庫教育大学名誉教授)、茂手木潔子(上越教育大学教授)

教育指導要領の改訂などに伴い、現在小・中・高校の教育現場では、日本音楽の導入に関する様々な試みが行われている。そうした中、適切な日本音楽史の概説書がないという声現場から多くとどいている。一方、大学教育においても、実は状況は同じであるといえよう。

本プロジェクト研究は、こうした教育現場の声に答えるべく、音楽学・音楽教育学の各分野の専門家が共同して、従来の日本音楽に関する概説書を検証し、また現場における取り組みを参照しつつ、教育現場においてどのような内容のものが必要とされるのかをまず検討する。そして、最終的には、最新の研究成果をふまえつつ、現場で使いやすい内容の概説書を作成し、それを学界から教育現場に発信することを目的とする。

以上の趣旨に沿って、今年度末までに計11回の研究会を実施した。現在は、新たな概説書の内容および章立ての検討をおこなっているところである。

<共同研究>

「日本音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化」(平成16年度)

研究代表者:久保田敏子

共同研究者：亀村正章（元KBS音楽番組プロデューサー・音源収集研究者）川向勝祥（元朝日放送技師・古典邦楽研究者）黒河内茂（ビクター文化振興財団前理事長・日本伝統音楽振興会代表）後藤静夫、田井竜一、竹内有一、中井猛（東京芸術大学非常勤講師・邦楽稀曲発掘研究者）林喜代弘（元毎日放送邦楽番組プロデューサー・古文書・古音源収集研究者）

音の記録技術は、日進月歩である。しかし、歴史に残る名演や、現在伝承の途絶えた貴重な作品の音源は散逸し、入手不可能な状態である。そこで、こうした音源の所在情報を整理し、可能な限り収集して、データベース化し、今後の研究に資することが当研究センターの責務であると考え、斯界の専門研究者とともに資料化を図る共同研究を立ち上げた。

本年度は、亀村正章氏、小林早苗氏、田辺秀雄氏、林喜代弘氏他の寄贈SPレコードを委託研究と連携してCD化し、整理した。同時に研究会にて、音源情報を交換しあい、資料化についてベストの方法を検討しあうとともに、金沢市の蓄音機館や国立劇場をはじめ、個人収集家宅を訪問し、収蔵物の見学と、その保管、整理方法等についてレクチャーをうけた。

なお、これらの資料は研究目的のみ利用することを視野に入れて、著作権等の問題も慎重に検討している。

「祇園囃子の源流に関する研究」(平成16年度)

研究代表者：田井竜一

共同研究員：入江宣子（仁愛女子短期大学非常勤講師・民俗音楽学）岩井正浩（神戸大学教授・音楽学）植木行宣（元京都学園大学教授・日本芸能文化史）垣東敏博（福井県立若狭歴史民俗資料館学芸員・民俗学）永原恵三（お茶の水女子大学教授・音楽学）西岡陽子（大阪芸術大学教授・民俗学）樋口昭（創造学園大学教授・日本音楽史）福原敏男（日本女子大学教授・歴史民俗学）増田雄（甲賀市役所市史編纂係嘱託・歴史学）米田実（甲賀市役所市史編纂係・民俗学）

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターで実施された、共同研究「山車囃子の諸相」(2000年度)・「ダシの祭りと囃子の諸相」(2001～2002年度)においてつみのこした課題をひきつぎながら、京都の祇園囃子の成立と展開の過程に焦点をあてて設定されたのが、本共同研究である。「風流拍子物」「羯鼓舞と一人立ちの獅子舞を主体とする山鉾の囃子」「シャギリ」の各諸相を大きな柱として、祇園囃子の源流に関する諸問題について、様々な角度からの考察・議論をおこなっている。

今年度を実施した共同研究会は、以下の通りである（場所は特記しない限り、いずれも京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室2）。

* 第1回研究会

2002年7月24日(土) 今後の共同研究の進め方について

* 第2回研究会

2004年9月23日(祝)・24日(金)
アスト津 アストホール(23日)・

三重県立美術館（24日）テーマ「祭礼図の諸相：『津八幡宮祭礼絵巻』を中心に」シンポジウムの聴講および「まつり・祭り・津まつり：ニューヨークから里帰り『津八幡宮祭礼絵巻』展の熟覧

* 第3回研究会

2004年10月16日（土）テーマ「風流拍子物の諸相 その1」(1) 植木行宣「風流拍子物の系譜」(2) 長谷川嘉和（滋賀県教育委員会文化財保護課、ゲストスピーカー）「近江のケンケト踊り・サンヤレ踊り・長刀振り」(3) 樋口昭「発表に対するコメント」(4) 総合討論

* 第4回研究会

2004年11月13日（土）「風流拍子物の諸相 その2：京都の風流拍子物」(1) やすらい花、サンヤレ、かっこすり、踊子に関する討論、コメンテーター：植木行宣・樋口昭

* 第5回研究会

2004年12月11日（土）、テーマ「シャガリの諸相 その1：能狂言におけるシャガリ」(1) 藤田隆則（大阪国際大学人間科学部助教授、ゲストスピーカー）「シャガリ、囃子物、渡り拍子 能狂言における」(2) 総合討論

* 第6回研究会

2004年12月19日（日）、テーマ「風流拍子物の諸相 その3：鷺舞を中心に」(1) 「京都の笹囃子：野田川町石川大命神社の笹ばやし」(2) 「津和野の鷺舞」(3) 樋口昭「鷺舞の囃子」(4) 福原敏男「かささぎ鉦の絵」(5) 総合討論

* 第7回研究会

2005年1月29日（土）・30日（日）テーマ「シャガリの諸相 その2：佐原囃子におけるシャガリ」(1) 坂本行広（佐原市教育委員会、ゲストスピーカー）「佐原囃子におけるシャガリ」(2) 入江宣子・福原敏男・米田実「発表に対するコメント」(3) 総合討論（30日は奈良の秋篠音楽堂における公演「萬歳と漫才」を鑑賞）

* 第8回研究会

2005年3月4日（金）千葉市立美術館における「風流祭礼図屏風」の熟覧

* 第9回研究会

2005年3月18日（金）京都国立博物館における「洛中洛外図」・「祇園祭礼図」の熟覧

* 第10回研究会

2005年3月21日（祝）テーマ「風流拍子物の諸相 その4：若狭と丹後の振り物」(1) 垣東敏博「若狭の棒振と太刀振」(2) 樋口昭「丹後の太刀振り」(3) 総合討論

* 第11回研究会

2005年3月25日（金）テーマ「風流拍子物の諸相 その5：風流拍子物と風流踊り」(1) 植木行宣「風流踊りをめぐって」(2) 神崎の扇踊り・油日の太鼓踊り・集福寺のちゃんちゃこ踊り・山畑の神事踊り・久多の花笠踊り・十津川の大踊りに関する討論、コメンテーター：入江宣子・樋口昭

「寺社の祭礼に関わる舞楽の伝承研究」

（平成15～16年度）

研究代表者：高橋美都

共同研究員：秋田真吾（春日大社宝物

館学芸員)、伊野義博(新潟大学教育人間科学部教授)、小野真(天王寺楽所雅亮会、雅楽練習所講師)、酒井信好(舞楽写真家、平成15年度のみ)

平成15年度に予備的实施との認識で開始した上記共同研究は、題目に掲げた内容のごく一部を実証的な試みで示すという形で、平成16年度にて完結、報告書作成の予定である。

旧三方楽所とその直伝以外に、全国に伝承されている舞楽は、国分寺や諸国一の宮の仏事・神事などの儀礼総体に組み込まれた一貫性や脈絡がそれぞれに認められ、さまざまな変容を遂げながらも、強い「維持」の意思のもと、各地の組織に守られて伝承されている。三方楽所の伝承とは「異質」であるとの前提のもとに「地方舞楽」として扱われているが、畿内の舞楽とのかかわりが地元で伝えられている舞楽について、実証的に舞の構成と動きにどのような一致点、相違点があるかを天王寺舞楽と新潟県能生町白山神社の舞楽・静岡県森町小國神社十二段舞楽の3者に求めたのが、15・16年度の共同研究内容といえる。

いままでの関連事業として、2002年4月には、伝統音楽研究センターとして天王寺楽所雅亮会の許可を得て、四天王寺聖霊会舞楽を公式撮影した。また、日本伝統音楽研究センターの平成12年度委託研究で、酒井信好が「舞楽関係映像の記録作成」と題して、地方舞楽の写真による詳細な記録を準備し、平成14年度委託研究で、伊野義博が「地方舞楽における唱歌(しょうが)と身体表現に関する研究」と題して、能

生町白山神社の舞楽と森町小國神社十二段舞楽の<太平楽>について詳細で、舞楽指導者の監修を受けたテロップ入り映像記録の作成をしている。伊野の委託研究は「伝承に大きな役割を果たす唱歌の分析」を直接対象としたが、典拠題材とした両所の<太平楽>(練習編・本番編、撮影:酒井)が添付提出されている。

それらの成果にもとづき、春日大社と天王寺で舞楽伝承を支える秋田真吾、小野真の両研究員に加わってもらい、平成15年度より予備的实施の形で共同研究を開始した。途中、秋田研究員が神社内での部署変更による多忙で参加が困難になり、酒井研究員も15年度のみ参加となり、実質上、伊野研究員の記録に依存する比較内容を、小野研究員と検証するという進め方になった。

(平成15年度)

*第5回

2004年2月1日(土) 17時 - 20時、静岡県掛川グランドホテル、ゲストスピーカーを迎えての聞き取り調査、ゲストスピーカー:遠江国一宮小國神社古式舞楽保存会関係者、大場輝夫(指南役)、白幡富幸(師匠)、大場篤(師匠)、北島恵介(楽人)、聞き手:小野真、高橋美都、酒井信好、伊野義博

*第6回

2004年2月10日(火) - 11日(水・祝日)、19時 - 22時(10日)、9時 - 12時(11日)、新潟大学新潟駅南キャンパス、(1)研究の打ち合わせ、(2)ゲストスピーカーを迎えての聞き取り調査、ゲストスピーカー:白山神社総代及び楽人会、室川

諭（総代）、大貫恵三（総代）、吉川和夫（楽長）、五十嵐保（楽人）、中島喜久太郎（楽人） 聞き手：小野真、高橋美都、酒井信好、伊野義博

（平成 16 年度）

* 第 7 回

2004 年 12 月 20 日（月）、10 時 - 20 時、日本伝統音楽研究センター合同研究室 2、（1）報告書原案の確認：全体構成・内容、急の部分構造 中間構造の確認・修正、（2）映像記録の抽出、映像記録の構成、部分の抽出、（3）今後の予定：報告書の作成予定・分担、映像記録の作成予定・分担

* 第 8 回

2004 年 12 月 25 日（土）、13 時 - 20 時、大阪ガーデンパレス、（1）報告書の修正部分の点検、（2）映像抽出箇所最終チェック

* 第 9 回

2005 年 2 月 28 日（月）、11 時 - 16 時、大阪ガーデンパレス、報告書の入稿前チェック

特別研究員・委託研究の研究報告

< 特別研究員 > (平成16年度)

告井幸男

「平安時代中・後期における楽の諸様相」

いわゆる摂関・院政期と呼ばれる時期の、奏楽の場と楽人の活動を中心に研究を進めた。当該期はあらゆる儀礼・儀式に音楽が大きな位置を占めており、何百年か後と比較しても、その意味の大きさは比べようがない。それとも関連して、後代では見られなくなった様相、すでに中世以前に廃絶した楽曲などの奏楽記事も多く見られる。これまで余り詳しく検討されることの無かった、斯様な諸相を本格的に考察するためにも基礎作業として、和田元研究員が11世紀初頭以前について作られた音楽年表に類するものを、更に後代まで作成する必要がある。楽人についても、後世には見えなくなってしまうが、当該期にはともすれば多・狛などよりも重要な位置を占めていた人物・家系が少なくない。10世紀初頭までの人物達についての考察は近日中に発表予定である。

10世紀以降においては、登美・山村・秦氏など狛・多氏等と関係の深い、また南都諸寺などむしろ京都以外に主たる活躍の場を持った諸氏について、及び孝道流のうち文机談に現れない前後の世代について、調査を進めている。いずれも時期的・地域的に史料は限られるが、それ故にまとまった編纂史料などからは知ることのできない、彼らの生の活動が窺える。併行して神楽歌「宮人」「弓立」の相承・伝承過程も追求中。地下楽家・堂上

楽家、武家、朝廷を巻き込む、日本音楽史の流れの一翼を担っているかと予想される。

研究テーマに関連する著作

* 2005.02.28 著書『摂関期貴族社会の研究』、東京、塙書房

* 2005.03.31 論文「雅楽の楽と近衛の楽」、『日本伝統音楽研究』2

研究テーマに関連する口頭発表

* 2004.11.08 「度者使考」、日本史研究会古代史部会、機関紙会館

廣井榮子

「日本近代における娘義太夫についての言説研究 豊竹呂昇を中心に」

娘義太夫研究は、東京における流行を扱ったものが多い。その背景として考えられるのは、情報の発信源が東京に集中していたことによる影響である。活字メディアとの関係から娘義太夫の「近代」が受容史として描かれるいっぽうで、その芸態が近世の「焼き直し」であったかどうかという点についての吟味は十分になされているとはいえない。実は、個々の演奏者の足跡を追ってみると、近世的なありようとして理解するには難しい様相が見えてくる。本研究で取り上げる豊竹呂昇も、一地域に限定されず、舞台からレコードまでと実に広範な活動を行った。また、その語り口についても、従来型の娘義太夫という範疇にはおさまりにくい演奏家であるということもわかってきた。

今年度は、その呂昇についての情報収集とともに、どのような演奏を行おうとしたのかをSPレコード音源を手がかりに再検討した。これと並行して、同時代の邦楽および女性芸能者が置かれていた状況を合わせ見ることによって、女性が演

じる音楽芸能がどのようなものであったかについても考察した。

研究テーマに関連する論文

- * 2004.11.30 “The Modernization of a ‘Traditional Capital’: Implications of the Performing Arts in Expositions in Kyoto”. The Musicological Society of Japan, ed. *Musicology and Globalization*. Tokyo: Academia Music, pp. 93-97.

三木俊治

「日本伝統音楽研究センターに寄贈された田辺コレクション楽器の研究」

日本伝統音楽研究センターに所蔵される、田辺尚雄・秀雄両氏収集の楽器を、楽器学を基礎とする包括的視点から研究した。

(1) 楽器の物理的整理・分類

CIMCIM の基準等を参考に、楽器を物理的に安定した状態におくために必要な処置を進めた。また、将来の展示計画に向け、楽器全体の維持管理システムの設計を開始した。

(2) 田辺楽器の現在における位置づけという観点での調査

収集者（田辺秀雄氏）への直接インタビュー、楽器に関する展示会等の資料、文献などから、田辺楽器の今日における同時代的意味を探る調査を始めた。

(3) 楽器画像、ドキュメント、音源等のデジタルアーカイヴ設計

田辺楽器データのアーカイヴについて、普及性と論理性を備えたフォーマット、将来の WEB 公開を視野に入れたデータベースを目指し研究・設計を進めている。

(4) 利用可能な楽器資料を用いた情報公開等の設計

保存に対して致命的な支障を来たさな

いと判断される楽器資料について、公開講座等での実物や収録音源の公開を含めた活用を図る方途を探っている。

本研究は、保存学、楽器学、音楽学等を横断する膨大な作業数を含むため、2年間でどの程度の成果公開が可能か未定であるが、学外専門家との連携も図った上で、慎重に作業を進めているところである。

森田柗山

「中尾都山の虚無僧修行と尺八古典本曲『紫鈴法』の研究」

中尾都山（1876 ~ 1956）は一代で都山流を江戸時代から続く琴古流に並ぶ大勢力に育てた。その要因は本曲の作曲や地歌箏曲の尺八手付けにおいて、それまでにない新たな手法を用いた点、また宮城道雄等新日本音楽の担い手との提携、その他楽譜出版、機関誌発行、組織運営等、いずれの分野でもそれまでの尺八流派にない新機軸を打ち出した点にある。

このように都山流は「新しい尺八」を打ち出して発展したため、古典本曲を学んだ都山の修行時代についての記録がほとんどなく、また限られた伝承についても異同が多い。

その中で先年、古典本曲「紫鈴法」の都山自筆譜が発見された。また 03 年に明暗真法流、最後の虚無僧と呼ばれる勝浦正山の尺八・楽譜等資料が遺族からセンターに寄贈された。これらの資料を基に「紫鈴法」の楽譜を正山、また正山から伝承を受けた神如道、酒井竹保の楽譜と比較検証した。これまで都山は正山の兄弟子である近藤宗悦の系譜を引くという伝承があったが、今回の「紫鈴法」の楽譜比較検証及び公開講座における復刻演奏によって、明暗真法流

の系譜を引くことが明らかになった。都山自筆譜は明治20～30年代の自筆譜約80曲を和綴じした「音譜」に収録されていた。「音譜」での表記は明暗真法流のフホ工式から現行の口ツレ式に変わってゆくが、この変遷過程を調べることにより、都山の修行時代がより明らかになると思われる。この点については今後の研究課題にしたい。

研究テーマに関連する講演と演奏

* 「知られざる中尾都山の魅力」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成16年度第2回公開講座、京都芸術センター講堂、2005年1月22日

「紫禮法」 勝浦正山、中尾都山、神如道、酒井竹保の楽譜を比較検証し、都山譜を勝浦正山の遺管を用いて復刻演奏した。

「懐月調」 都山の処女作であり、現在でも岩清水・寒月と並び都山流を代表する独奏本曲であるが、今回演奏記録を調べ、都山自身の演奏例が岩清水・寒月と比べて極端に少ないことが判明した。この理由として、懐月調初段は同一フレーズの反復が多い、転調が少ない等、古典本曲と似た特徴が多く、青海波等の「新しい」本曲が作曲されてから、演奏が忌避されたと考えられる。

「青海波」 日露戦争旅順港閉塞を題材とした都山の新しい尺八を象徴する作品。時代背景の解説と当時の邦楽・洋楽等が混在した演奏会の様子を紹介した。

「鶴の巢籠」 鶴の巢籠は尺八各流派で伝承されているが、都山流は現行の大阪系胡弓本曲とほぼ一致している。これは腕先検校・寺内検校（都山祖父）・中尾み津（都山母）を通じて伝承されたと考えられる。胡弓本曲では三弦の地を入れて演奏する。一方現在都山流では尺八の地で演奏す

るが、明治・大正期には三弦地で演奏した記録が発見された。本講座で三弦地（巢籠地と砧地の引分け）による復刻演奏を行った。

旧年度分の補遺

小川佳世子 平成15年度の研究テーマに関連する論文

* 2005.03.31 「能《融》と応永の詩画軸 『柴門新月図』をめぐる」、『日本伝統音楽研究』2

告井幸男 平成15年度の研究テーマに関連する論文

* 2004.03.31 「和邇部大田磨考」、『日本伝統音楽研究』1

山田智恵子 平成14年度の研究テーマに関連する論文

* 2004.03.31 「義太夫節地合における変形可能性 同一曲における演奏者による変形可能性」、『日本伝統音楽研究』1
和田一久 平成14年度の研究テーマに関連する論文

* 2004.03.31 「和琴前史」「トビノヲゴト考」、『日本伝統音楽研究』1

<委託研究>（平成16年度）

「歴史的演奏のデジタルアーカイブ」 亀村正章

「東明節に関する散逸資料調査」 平岡久治

専任研究員の活動報告

吉川 周平

著作活動

- * 2004.03 「日本の地域社会における民俗芸能による固有文化の本質的な伝承 死者の霊の聖なるものへの再生儀礼としての盆踊りをめぐって」、日伊世界遺産研究会、京都市立芸術大学、イタリア・シエナ大学編『第3回日伊国際シンポジウム 文化環境の活性化 文化遺産保存のために』、京都、日伊世界遺産研究会、京都市立芸術大学、イタリア・シエナ大学、pp.48-51
- * 2004.03 “The Transmission of the Folk Performing Arts in Japanese Regional Communities: The “Bon Odori” (Bon dance) as a Ritual for the Spiritual Rebirth of the Dead”, Japan-Italy Association of World Heritage Studies, Kyoto City University of Arts & University of Siena eds., *Symposium The Revitalization of Cultural Environment-Management for the Preservation of Cultural Heritage*. Kyoto: Japan-Italy Association of World Heritage Studies, Kyoto City University of Arts & University of Siena, pp.48-51
- * 2004.03 「盆踊りの変容と都市的飛躍」、中部高等学術研究所共同研究会・藤井知昭編『アジアにおける文化クラスター() 現代都市文化の変容』、愛知、中部高等学術研究所、pp.20-29
- * 2004.03 「総合討論」、藤井知昭・岩井正浩・和崎春日・塚田健一・矢島妙子・福岡正太・久万田晋・鈴木道子・

小島美子・加藤富美子・樋口昭・谷本一之・井口淳子との共著、中部高等学術研究所共同研究会・藤井知昭編『アジアにおける文化クラスター() 現代都市文化の変容』、愛知、中部高等学術研究所、pp.76-88

- * 2004.08.16 「月曜随想 瀬戸内のおどり」、『四国新聞』朝刊
- * 2004.10 「日本の宗教的儀礼における2種の身体動作の様式」(英文要約・韓国語訳付)、*The 8th International Conference on Asian Music: Shaman Ritual Music of Asia*. Soul: The National Center for Korean Traditional Performing Arts. pp.197-217
- * 2004.12 「舞踊表現の東西 かぶきのオドリ を考える」、『表象芸術 2003 アジアの歌と舞い』、京都、日本学術会議芸術学研究連絡委員会・立命館大学 21世紀COEプログラム・京都アート・エンタテインメント創成研究、pp.37-43
- * 2004.12 「ディスカッション」、上倉庸敬・樋口聡・岸文和・小池三枝・山口修・森下はるみ・神林恒道・原田奈名子・花輪(聖徳大学)との共著、『表象芸術 2003 アジアの歌と舞い』、京都、日本学術会議芸術学研究連絡委員会・立命館大学 21世紀COEプログラム・京都アート・エンタテインメント創成研究、pp.48-56

口述活動

- * 2004.01.24 研究発表「盆踊りの変容と都市的飛躍」、「アジアにおける文化クラスター() 現代都市文化の変容」、中部大学リサーチセンター2階大会議室
- * 2004.02.07 講演「日本の伝統的音楽

と身体動作から読みとられるもの カミとホトケをめぐって 」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成15年度第3回公開講座、キャンパスプラザ京都5階第1講義室

- * 2004.06.05 講演「地域社会における日本の固有文化の伝承 死霊の葬送儀礼としての盆踊りをめぐって 」、京都市生涯学習総合センター京都アスニー・京都市立芸術大学共催講座「文化環境の活性化 文化遺産保存のために 」、京都アスニー第2研究室B
- * 2004.10.09 研究発表「日本の宗教的儀礼における2種の身体動作の様式」(韓国語通訳付) The 8th International Conference on Asian Music: Shaman Ritual Music of Asia、ソウル、国立国楽院
- * 2004.11.20 演目解説「杭全神社の御田植神事」、第54回全国民俗芸能大会、東京、日本青年館
- * 2004.12.18 司会「小学校における日本民俗音楽教育の現状をめぐって」、「中学・高校における日本民俗音楽教育の現状をめぐって」、「学校現場における日本民俗音楽教育の実践 その現状と課題 」、日本民俗音楽学会第4回民俗音楽研究会、秩父、ホテル美山

プロデュース活動

- * 2004.11.20 演出・舞台監督(共同)「第54回全国民俗芸能大会」、東京、日本青年館

国際会議

- * 2004.10.08 ~ 09 The 8th International Conference on Asian Music: Shaman Ritual Music of Asia、ソウル、国立国楽院

調査活動

- * 2004.08.14 香川県丸亀市本島町笠島の笠島盆踊りを調査。
- * 2004.08.15 岡山県玉野市と倉敷市の盆踊りを調査。
- * 2004.08.16 岡山県倉敷市下津井の盆踊りを調査。
- * 2004.08.21 岡山県倉敷市下津井の円福寺の観音踊りを調査。
- * 2004.08.23 香川県小豆郡土庄町浄源坊の子安地藏の祭りを調査。
- * 2004.10.16 香川県小豆郡池田町の龜山八幡宮例大祭を調査。

対外活動

- * 文化審議会文化財分科会第5専門調査会専門委員
- * 大阪府文化財保護審議会委員
- * 香川県文化財保護審議会委員
- * 香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館運営協議会会長
- * 日本歌謡学会評議員
- * 日本民俗音楽学会常任理事
- * 舞踊学会理事
- * 民族芸術学会理事
- * 民俗芸能学会理事

久保田 敏子

著作活動

- * 2004.01.01 <連載>地歌箏曲楽曲解説「若菜」、03.01「新娘道成寺」、05.01「新浮舟」、07.01「夕顔」、09.01「秋風の曲」、11.01「笹の露」、2005.01.01「松竹梅」、03.01「春の曲」(創明音楽会会報「創明」224号~301号)
- * 2004.01.25 論文「近世邦楽の中の伊

- 勢音頭」(『秋篠文化』第2号、秋篠音楽堂運営協議会)
- * 2004.02.05 <連載>古曲をたずねて「松竹梅」, 04.05「万歳」, 06.05「芥子の花」, 08.05「玉川」, 10.05「虫の音」, 12.05「冬の曲」, 02.05「春重ね」(「温故知新」(66～72) 都山流尺八楽界会報『楽報』隔月938～950号)
- * 2004.03.31 編集・分担執筆「三味線組歌 中組・奥組」(日本伝統音楽資料集成3『邦楽歌詞研究』)京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター)
- * 2004.03.31 エッセイ「ハタと手を打つ」(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター『所報』第3・4合併号)
- * 2004.04.05 小論「当道座～その表芸と裏芸～」(「地歌・箏曲の先師達」、(社)日本三曲協会『会報』87号)
- * 2004.04.17 曲目解説「御山獅子」(『人間国宝による舞踊邦楽鑑賞会』プログラム、国立劇場)
- * 2004.04.18 地歌箏曲曲目解説「春の宮曲」「秋風辞」「吾妻獅子」「四季眺」「神楽初」「新道成寺」(なにわ芸術祭『琴友会地歌箏曲演奏会』プログラム、サンケイホール)
- * 2004.04.22 資料作成「源氏物語とくこと」(京都アスニー公開講座配布資料)
- * 2004.05.15 小論「長谷校校と九州系地歌その3」(『長谷校校記念邦楽コンクール』本選プログラム、熊本市市民会館)
- * 2004.06.19 曲目解説「春の海」「きぬた」「八重衣」「比良」「道灌」(『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ』プログラム、いづみホール)
- * 2004.06.27 地歌曲目解説「老松」「春重ね」「玉川」(『ゆらぎ』伊藤志野演奏会』プログラム、俵屋吉富京菓子資料館)
- * 2004.07.20 論考「箏組歌と菊田歌雄について」、箏組歌曲目解説「霞の曲」「乙の組」「甲の曲」「乙の曲」「古流四季源氏」「公源氏」「当流四季源氏」「勘文乙の曲」「鑑の曲」「八重垣」「飛梅」「島原弄斎」「筑波の曲」(『箏組歌秘曲・極秘曲全集』CDアルバム別冊解説書、S-Two Corporation DOOM05244, 05254)
- * 2004.07.26 エッセイ「ゆらぎ」(『現代のことば』京都新聞夕刊)
- * 2004.08.28 地歌箏曲曲目解説「荒れ鼠」「都十二月」「寛閑一休」「甲の曲」「残月」(『二世菊田歌雄追善演奏会』プログラム、国立文楽劇場)
- * 2004.09.22 エッセイ「携帯電話」(『現代のことば』京都新聞夕刊)
- * 2004.10.05 小論「地歌のはじまり～黎明期における先師の知恵～」(「三曲界の先師達」、(社)日本三曲協会『会報』88号)
- * 2004.10.06 創作箏曲曲目解説「道元禅師詠歌抄」より「庵の四季」「月」(CD『箏歌の今昔』解説書、S-Two Corporation DOOEMO5304)
- * 2004.10.21 曲目解説「さらし風手事」「尺八二重奏曲虹」「さぎ草双紙～姫路城築城400年によせて」「尺八と十七弦のための二章紫苑」「尾上の松」(姫路市文化振興財団主催『尺八と箏の夕べ』、姫路キャスパホール)
- * 2004.10.24 曲目解説、箏組歌「明石」山田流箏曲「六玉川」「八重垣」(『佐々木千香能箏曲リサイタル』プログラム、紀尾井小ホール)
- * 2004.11.07 曲目解説「秋の曲」「虫の武蔵野」「道灌」(『桐絃社シリーズ演奏会』プログラム、中之島公会堂)
- * 2004.11.22 エッセイ「怖いが面白

い<ことば>」(『現代のことば』京都新聞夕刊)

- * 2004.12.15 論考「箏組歌について」、曲目解説箏組歌「四季曲」「橋姫」「思川」「桐壺」「当流四季源氏」「雲井曲」(鳥居名美野主催第4回『組歌の会』、紀尾井ホール)
- * 2004.12.17 曲目解説、長唄「五段目角兵衛獅子」「有喜大尽」(『中島勝祐りさいたる』プログラム、紀尾井ホール)
- * 2001.12.17 曲目解説、長唄「越後獅子」「助六」、山田流箏曲「竹生島」、長唄「鶯娘」、一中節「廓の寿」、長唄「綱節」(岡安喜久祐『一門会』プログラム、紀尾井ホール)
- * 2004.12.21 曲目解説「六段調」「嵯峨の秋」「ままの川」「五段砧」「萩の露」(CDアルバム『生田流箏曲 青木雅蓉』別添解説書、ピクチャー伝統文化振興財団 VZCF-1001)
- * 2004.12.21 曲目解説「琉球組」「芦刈」「名所土産」、打合せ「松竹梅・菊の朝」(CDアルバム『地歌 菊信木洋子』別添解説書、ピクチャー伝統文化振興財団 VZCF-1002)
- * 2005.01.01 小論「まんざい三態～万歳・万才・漫才」(『近畿文化』661号、近畿文化会)
- * 2005.01.22 資料作成「知られざる中尾都山の魅力」(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成16年度第2回公開講座配付資料)
- * 2005.01.24 エッセイ「氾濫する省略語」(『現代のことば』京都新聞夕刊)
- * 2005.01.30 論文「万歳から漫才へ」(『秋篠文化』第3号、秋篠音楽堂運営協議会)
- * 2005.03.31 論文「地歌・箏曲におけ

る弄齋物」(『日本伝統音楽研究』(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要)第2号)

口述活動

- * 2004.04.18 曲目解説「越後獅子」「三段の調」「ままの川」「花鳥風月」「鶯の曲」「宇治巡り」「宇治巡り」「楳枕」「ことうた～わらべ唄～」「松の寿」「虫の武蔵野」「住吉詣」「春重ね」「さくら21」(『当道友楽会定期演奏会』、大阪メルパルクホール)
- * 2004.04.23 講演「『源氏物語』とコト」(京都アスニー公開講座)
- * 2004.05.23 講演「上方と浄瑠璃」、曲目解説「天網島」「城山狸」(レクチャー・コンサート『中島勝祐上方浄るり演奏会』(ポラミュージアム、ポラ伝統文化振興財団主催))
- * 2004.07.10 曲目解説「越後獅子」「今小町」「桜川」「春の曲」「新青柳」「萩の露」「五段砧」「御山獅子」「京松風」「宇治めぐり」「松竹梅」「山姥」「残月」(『琴友会勉強会』、守口エナジーホール)
- * 2004.09.12 曲目解説「菊の壽」「新娘道成寺」「千鳥の曲」「新娘道成寺」「里の暁」「夜々の星」「松竹梅」「夏夜の曲」「桂男」「園の秋」「冬の曲」(『祥門会地歌箏曲演奏会』、サンケイホール)
- * 2004.09.17 コメント出演「派手」の語源について(『ことばの場～語源をたずねて～』、NHK・TV)
- * 2004.10.09 レクチャー「上方浄瑠璃と創作」、解説「冥土の飛脚」「城山狸」(レクチャー・コンサート『上方浄瑠璃の会』、玉水会館)
- * 2004.12.18 解説出演「菊原初子さんのこと」(『芸能花舞台』、NHK・TV)

- * 2004.12.03 曲目解説「青柳」「京鹿子」「待つにござれ」「浅黄」「飛驒」「琉球・千代の恵」「下総細り」(『三味線組歌演奏会』、京都会館第2ホール)
- * 2005.01.22 企画・解説「知られざる中尾都山の魅力」(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成16年度第2回公開講座、京都芸術センター)
- * 2005.01.30 講演「万歳から漫才へ」(伝統芸能公演『万歳と漫才～楽しく分かるまんざいの今昔』、秋篠音楽堂)
- * 2005.03.20 曲目解説、箏組歌「花の宴」、地歌「闇の扇」「玉取海士」(『比類無き至高の芸術～地歌～』、大阪美術倶楽部)

調査・取材活動(多数につき省略)

社会活動

- * 京都コンサートホール運営委員
- * 京都の秋音楽祭実行委員
- * 京都市奨励新人審査委員
- * 京都創生百人委員会委員
- * 京都市芸術センター運営委員
- * 京都府古典芸能振興公演補助金審査委員
- * 奈良秋篠音楽堂運営委員
- * 奈良市国際音楽交流評議会理事
- * 大阪21世紀協会企画運営委員
- * 大阪市文化財課地歌調査委員会委員
- * 独立行政法人文楽劇場短期公演運営委員
- * 文化庁文化審議会第4部門専門委員
- * 龍谷大学大学院国際文化科学研究科博士論文審査委員
- * 所属学会：(社)東洋音楽学会(副会長・理事・機関誌編集委員会委員長)、日本歌謡学会(評議員)、楽劇学会会員、日本民俗学会会員
- * 前進座矢の会会員

後藤 静夫

著作活動

- * 2004.04.15 書評「水野悠子著『江戸/東京 娘義太夫の歴史』、『藝能史研究』165、pp.43-45
- * 2004.10.05 曲目解説『本物の舞台芸術体験事業 文楽』、東京、文化庁、「伊達娘恋緋鹿子」「壺坂観音靈験記」、東京、文化庁
- * 2004.11.06 解説「文楽と座敷からくり」、文楽劇場企画展示パンフレット『文楽とからくり』、大阪、国立文楽劇場、pp.1-2
- * 2004.11.10 連載「鑑賞力アップ講座・文楽を楽しむ その1 語りが文楽の基本です」、『上方芸能』154号、pp.100-103
- * 2005.02.10 連載「同 その2 一撥も無駄な音はない」、『上方芸能』155号、pp.100-103

プロデュース活動

- * 2004.10.27 企画・解説・司会「2時間でわかる世界遺産・文楽 実演を交えて」、京都市立芸術大学日本伝統音楽センター、平成14年度第1回公開講座、実演：竹本津駒大夫、竹澤団吾、吉田和生、吉田和右、吉田玉勢
- * 2004.11.06～12.04 監修 国立文楽劇場開場20周年記念「文楽と座敷からくり」展、国立文楽劇場
- * 2005.01.14 監修・演出「映画 手の美(仮称)」文楽関係部分、ポーラ伝統文化振興財団

講演・口述活動

- * 2004.04.22 放送解説「義経千本桜・

渡海屋の段』、NHK-FM 『邦楽百番』

- * 2004.05.25 解説『文楽イン宝塚』、「文楽の広がり」、ソリオホール
- * 2004.06.16 講演「伝えるということ 文楽の稽古と師弟関係」、青雲会
- * 2004.07.23 講演「文楽の三業と作品」、ジバンクラブ
- * 2004.08.06 名越昭司氏（文楽床山技術師）と対談（鬘司庵機関誌「もっとい」第2号、2004. 10. 20、pp.6-9に掲載）
- * 2004.10.29 ~ 31 発表・コメント・討議『京都文化会議 2004 地球化時代のこころを求めて』、ワークショップ2「こころの病理」、セップ・リンハルト、伊東久重、奥乃博、後藤静夫、篤木蓬生、宮台真司、山極寿一、京都大学百周年時計台記念館
- * 2005.01.29 シンポジウム「全国人形芝居サミット & フェスティバル in KAMEOKA」、コーディネーター：植木行宣、パネリスト：宮田繁幸、後藤静夫、権藤芳一、鬼頭秀明、坂東千秋

講義・講座活動

- * 2004.05 知立市文化会館シアターカレッジ講師「伝統芸能：日本伝統芸能概論」、知立市文化会館
- * 2004.07.06 ~ 08 人形劇パペットアーク特別講座講師「文楽」、香川県とらまる人形劇研究所
- * 2004.11 京都造形芸術大学特別講師「舞台芸術論：日本芸能史」、文楽理論、京都造形芸術大学春秋座
- * 2004.11 大阪市立大学・和泉市教育委員会共催文学講座講師「武士と文学」、『仮名手本忠臣蔵』、国立文楽劇場

調査・取材活動

- * 2004.06.17 名越昭司氏（文楽床山技術師）聞き取り取材（東京文化財研究所・研究協力）
- * 2004.08.11 竹本住大夫師聞き取り取材
- * 2004.08.24 豊竹嶋大夫師聞き取り取材
- * 2004.11.26 鶴澤寛治師聞き取り取材

対外活動

- * 知立市芸術創造協会企画・経営委員
- * 香川県三野町教育委員会特別委員（讃岐源之丞座後継者育成指導）
- * 京都大学人文科学研究所共同研究「文明と言語」（代表横山俊夫）研究班員

田井 竜一

著作活動

- * 2004.07.07 共編書、姫野翠『異界へのメッセンジャー』、東京、出帆新社（井上貴子・小西正捷との共編、「年譜」「著作目録」の作成をふくむ）
- * 2004.03.31 調査報告「京都祇園祭り 鶏鉾の囃子」、『日本伝統音楽研究』（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要）第1号、pp.213-230（増田雄との共同執筆）
- * 2004.02.01 解説「山・鉾・屋台の祭りの囃子と祇園囃子」、『横浜能楽堂企画公演「日本の音」 第4回：町衆の心意気 プログラム』、神奈川、横浜能楽堂（財団法人横浜市芸術文化振興財団）
- * 2004.12.15 事典項目「秋道智彌（1946-）・関根久雄（1962-）・田井竜一（1961-）編『ソロモン諸島の生活誌 文化・歴史・社会』明石書店、1996、小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・

- 渡辺公三編『文化人類学文献事典』、東京、弘文堂、p.302
- * 2004.01.20 報告「第54回大会レポート：研究発表C1」、『(社)東洋音楽学会 会報』第60号、p.3
 - * 2004.07.08 インタビュー記事「ちょっとアカデミー：祇園祭 2004 第4講音楽学」、『京都新聞』夕刊
 - * 2004.07.08 翻訳、姫野翠「アミの音楽における文化変容」、姫野翠『異界へのメッセンジャー』、東京、出帆新社、pp.139-152

口述活動

- * 2005.02.05 報告『『民俗芸能』と『伝統の創造』』、日本学術振興会人文・社会科学学術振興プロジェクト研究、研究領域「現代社会における言語・芸術・芸能表現の意義と可能性について研究する領域」、プロジェクト研究「伝統と越境 とどまる力と越え行く流れのインタラクション」、研究グループ「伝統から創造へ」、2004年度第1回共同研究会、2005年2月5日(土)、聖徳大学2号館研修室。
- * 2005.01.27 ~ 28 討論参加、中部高等学術研究所共同研究会「アジアにおける文化クラスター()：時代認識の変容 英雄・カリスマ・アイドル像をめぐる」、中部大学リサーチセンター大会議室
- * 2004.09.18 講座「山・鉾・屋台の祭りと囃子」、大津市歴史博物館土曜講座、大津市歴史博物館ホール

調査・取材活動

- * 2004.02.08 水口ばやし八妙会調査
- * 2004.03.26 ~ 27 飯田お練り祭り調査

- * 2004.07.15, 19, 30 ~ 08.01 石取り祭り調査
- * 2004.07.16 ~ 17 京都祇園祭り調査
- * 2004.09.05, 13, 11.09 京都祇園祭り菊水鉾囃子調査
- * 2004.11.20, 12.13, 2005.02.19, 03.19 京都祇園祭り長刀鉾囃子調査
- * 2004.12.16 若宮おん祭還幸の儀参観
- * 継続中 京都祇園祭り北観音山囃子調査、桂地蔵前六斎念仏調査

学内活動

- * 広報委員会電子メディア小委員会委員
- * 将来構想委員会教育研究理念・計画部会部会員(2004.07 ~ 2005.03)
- * 将来構想委員会公立大学法人問題調査研究会委員(2004.10 ~ 2005.03)

対外活動

- * くらしき作陽大学音楽学部非常勤講師(2004.10 ~ 2005.03)
- * 京都ノートルダム女子大学人間文化学部非常勤講師(2004.04 ~ 09)
- * (社)東洋音楽学会理事、機関誌編集委員会委員、情報委員会委員(~ 2004.10)、改革検討委員会委員(2004.11 ~)
- * 日本音楽学会関西支部委員
- * 日本ポピュラー音楽学会選挙管理委員会委員(2004.06 ~ 11)
- * 日本ポピュラー音楽学会監事(2004.12 ~)
- * A member of the editorial Board, *Perfect Beat: The Pacific Journal of Research into Contemporary Music and Popular Culture*
- * 国立民族学博物館共同研究員
- * 中部高等学術研究所共同研究員
- * 日本学術振興会人文・社会科学学術振興プロジェクト研究共同研究員
- * 春日神社の石取祭調査団員(桑名市教

育委員会)

- * 所属学会：(社)東洋音楽学会、日本オセアニア学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会、日本民族学会、民族藝術学会、International Council for Traditional Music, Society for Ethnomusicology

高橋 美都

著作活動

- * 2004.09.15 科学研究費補助金研究成果報告書『日本伝統音楽所用楽器のデジタルアーカイブ化研究』、研究代表者：廣瀬量平、研究課題番号：13610057、平成13～15年度基盤研究(C)(2)、分担執筆
- * 2005.03.31 研究会報告書『四天王寺聖霊会舞楽・能生町白山神社舞楽・遠江国一宮小國神社古式舞楽における太平楽(泰平楽)の三者比較』日本伝統音楽資料集成5(平成15-16年度の共同研究「寺社の祭礼に関わる舞楽の伝承」の報告書) 京都、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、編集代表

その他

- * 2002～2004年度 科学研究費基礎研究C『古楽器の形態と音色に関する総合研究』、研究代表者：高桑いづみ、研究分担者
- * 2004.04～ 奈良大学非常勤講師
- * 所属学会：東洋音楽学会、日本歌謡学会、芸能史研究会、楽劇学会、民族芸術学会、民俗芸能学会、民俗音楽学会、国際音楽資料情報協会

竹内 有一

著作活動

- * 2005.03.31 研究ノート「豊後三流の曲節譜(一) 研究の序説と資料」、『日本伝統音楽研究』(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要)第2号、pp.47-56
 - * 2005.03.31 研究ノート「近世邦楽の描く江戸の名所 <佃>を中心に」、『比較日本学研究センター研究年報』創刊号、東京、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、pp.45-52
 - * 2004.10.30 翻刻(江戸番付書入れ部分の担当) 粕谷宏紀・歌舞伎年表研究会編『日本大学総合学術情報センター所蔵 DVD 版歌舞伎番付集成』、東京、八木書店
 - * 2005.02.16 資料作成「ウェブサイト音楽教育情報について」、科学研究費補助金基盤研究C-2「ウェブサイト音楽教育情報の有効活用に関する研究」(研究代表者：深見友紀子)に対するデータ提供
 - * 2004.11.14 解説「豊かな近江の豊かな芸能」、『滋賀県伝統芸能フェスティバル 詩吟で綴るふるさと近江』、滋賀、滋賀県立長浜文化芸術会館、p.8
 - * 2004.11.30 エッセイ「探索」、『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 所報』第5号、pp.33-34
- 口述活動
- * 2004.07.11 研究発表「近世邦楽の描く名所」、お茶の水女子大学比較日本学研究センター第6回国際日本学シンポジウム「比較日本学の試み」、お茶の水女子大学大学院
 - * 2004.07.11 ディスカッション「江戸

東京の名所と芸能」 同上シンポジウム

- * 2004.10.18, 12.17, 2005.01.10, 02.16 報告「教育用に提供される日本音楽コンテンツについて」、科学研究費補助金基盤研究C-2「ウェブサイト音楽教育情報の有効活用に関する研究」に関わる調査協力、京都女子大学発達教育学部深見研究室
- * 2004.11.14 解説「近江八景」「楳枕」「近江のおかね」、滋賀県伝統芸能フェスティバル 詩吟で綴るふるさと近江、滋賀県立長浜文化芸術会館
- * 2004.12.04 研究発表「曲節譜史料としての浄瑠璃正本」、第4回近世邦楽研究会、上野学園日本音楽資料室

プロデュース活動

- * 2004.04.24 共同企画「音楽のドキュメンテーション：音楽図像学研究の現状と課題」、慶應義塾大学アートセンターADR研究会・国際音楽資料情報協会日本支部・洋楽流入史研究会による合同研究会（洋楽流入史研究会担当）、慶應義塾大学三田キャンパス
- * 2004.05.22, 07.31, 12.04 企画・司会、第2・3・4回近世邦楽研究会、上野学園日本音楽資料室

演奏活動

- * 2004.07.11 お茶の水女子大学比較日本学研究センター第6回国際日本学シンポジウム「比較日本学の試み」、常磐津「千代の友鶴」「雷船頭」の浄瑠璃演奏と解説（浄瑠璃：常磐津秀三太夫・若音太夫、三味線：岸澤式松・常磐津菊与志郎）、お茶の水女子大学大学院
- * 2004.04.11, 07.04, 12.12 阿吽の会、常磐津「大森彦七」「関の扉」他の浄瑠璃

演奏、スペースナワ

- * 2004.08.22 名古屋むすめ歌舞伎公演、常磐津「関の扉」の浄瑠璃演奏、サンポートホール高松
- * 2004.10.31 NHK教育テレビ「芸術劇場」、常磐津他「紅葉狩」の浄瑠璃演奏、2004.02 日本舞踊協会公演
- * 2004.11.20 NHK教育テレビ「芸能花舞台」、常磐津「飴売り」の浄瑠璃演奏、2004.02 日本舞踊協会公演
- * 2004.11 CS「タカラヅカ・スカイ・ステージ」、常磐津「子宝三番叟」他の浄瑠璃演奏、2004 宝塚歌劇団舞踊公演
- * 2004.12 南座顔見世大歌舞伎、常磐津他「身替座禅」の浄瑠璃演奏、京都南座
- * 2005.02.23 NHK-FM「邦楽のひととき」、常磐津「鴛鴦」の浄瑠璃演奏

調査・取材活動

- * 2004.10.08, 10.25, 11.27, 12.03, 12.04 詞章本等の書誌調査およびデータ作成（上野学園日本音楽資料室）
- * 2004.07.03 文書資料の修理技術講座（京都造形芸術大学）
- * 2004.05.06 住吉踊り（文楽劇場）
- * 2004.05.14 明福寺初代都一中奉納
- * 2004.05.28 十輪寺業平忌三弦法要
- * 2004.11.04 特別展「王の舞を見に行こう！」（福井県立若狭歴史民俗資料館）
- * 2004.12.16 若宮おん祭遷幸の儀
- * 2005.01.30 萬歳と漫才（秋篠音楽堂）

対外活動

- * 宮城学院女子大学非常勤講師（音楽科「生活音楽論講義」2004.09.08～11）
- * 上野学園日本音楽資料室共同研究員
- * 京都大学人文科学研究所岡田研究室主催勉強会「楽器演奏におけるテクネー

とテクノロジー」への参加

- * (社)東洋音楽学会 東日本支部委員
例会担当(～2004.8)
- * 楽劇学会 編集委員
- * 近世文学会、藝能史研究会、歌舞伎学
会、日本音楽学会、長野郷土史研究会
各会員
- * 常磐津協会 部員・正会員
- * 洋楽流入史研究会 事務・ホームペ
ージ管理・メール会報発行の担当
- * 近世邦楽研究会 幹事

スティーヴン・G・ネルソン

(2004.03.31 まで在職)

著作活動

- * 編著書
 - ・2004.03.31 『日本三代実録音楽年表』
「琴・箏の系譜 楽器、文献と奏法」
研究会編(研究代表者スティーヴン・
G・ネルソン) 京都、京都市立芸術大
学日本伝統音楽研究センター 日本伝
統音楽資料集成 4
- * 読み上げ原稿英訳
 - ・2004.01.09 YAMADERA Mitsutoshi,
“Relief of musicians from the tomb of Wang
Chuzhi, of the Chinese Five Dynasties
Period (tenth century)”(山寺三知「五代
王処直墓の散楽図について」) Session:
New research in music iconography in
Japan (セッション:日本における新し
い音楽図像学研究) ICTM 2004 (国際
伝統音楽学会世界大会) 中国、泉州
 - ・2004.01.09 NAKAYASU Mari, “The
wind harp as decoration for Buddhist archi-
tecture in Japan and China”(中安真理
「箏篳と風箏 仏教建築を荘厳する弦鳴

楽器について」)、Session: New
research in music iconography in Japan
(セッション:日本における新しい音楽
図像学研究) ICTM 2004 (国際伝統音
楽学会世界大会) 中国、泉州

口述活動

- * 研究発表
 - ・2004.01.09 “Music and dance in the
Nejū gyōji emaki, a set of illustrated
scrolls from twelfth-century Japan”(「12
世紀日本の絵巻『年中行事絵巻』にお
ける楽舞」) Session: New research in
music iconography in Japan (セッシ
ョン:日本における新しい音楽図像学
研究) ICTM 2004 (国際伝統音楽学
会世界大会) 中国、泉州
- * 講演
 - ・2004.02.20 “Preparing a path to the Pure
Land: Saving Shigehira in *The Tale of
Heike*”(「浄土への導き『平家物語』
における重衡の救済」) Graduate
Colloquium, Music Department, University
of California at Berkeley
 - ・2002.02.23 “Language, text forms, and
musical style in standard Japanese Buddhist
liturgy: As exemplified by the Shingon ritu-
al-form *Rishu Zanmai*”(「日本の仏教法
会における言語、テキスト形式および
音楽様式 真言宗『理趣三昧』を例と
して」) Music Department, University
of California at Davis
- * 企画・指導・解説
 - ・2004.03.30 模擬法会として『般若心經
三昧』 Morrison Hall, Department of
Music, University of California at Berkeley,
曲目:上堂の鐘、行道の讃《四智梵語讃》、
二箇法要《云何唄》《散華》、表白(英文

による新作) 前唱礼《五悔》(至心帰依、至心懺悔、至心随喜、至心勧請)《般若心経》、後唱礼《五悔》(至心廻向) 行道の讃《四智梵語讃》

対外活動

- * 上野学園日本音楽資料室共同研究員
- * 宗教学法人寶玉院附属日本伝統音楽研究所非常勤講師「日本音楽史」
- * 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部役員 (広報担当)
- * 2004.01.19 ~ 2004.03.31 Visiting Associate Professor, Department of Music, University of California at Berkeley
- * 所属学会: 東洋音楽学会、日本歌謡学会、日本音楽学会、佛教文学会、中世文学会、International Council for Traditional Music、Musicological Society of Australia、Association for Asian Studies、International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres (IAML)、Society for Ethnomusicology、Society for Asian Music

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要 2004

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指します。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に呈している日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものである、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を解明し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

センターの活動

資料の収集・整理・保存

文献資料(図書、逐次刊行物、古文献、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む)

音響映像資料

楽器資料

絵画資料

データベースなどの電子資料

日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究

専任研究員による個人研究

特別研究員による特定のテーマの研究

研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究

日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究

国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究

センターが外部と共同して行う調査研究

活動成果の社会への提供

公開講座・セミナー等の開催

紀要・所報・資料集などの出版

インターネットなど電子媒体による公開

研究の対象

伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみすえる

明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承
古代

祭祀歌謡と芸能(楽器等の考古学的遺物を含む)

上代・中古

仏教音楽(声明等)

宮廷の儀礼・宴遊音楽(雅楽等)

中世

仏教芸能(琵琶、雑芸、尺八等)

武家社会の芸能(能・狂言等)

流行歌謡(今様、中世小歌等)

近世

外来音楽(切支丹音楽、琴楽、明清楽)

劇場音楽(義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等)

非劇場音楽(地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等)

流行歌謡(小唄、端唄等)

近代社会での伝統音楽の展開をみすえる

伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究

伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究

広い視野で生活の音楽をみすえる

民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族の音楽・芸能の研究

生活における音楽・芸能(わらべうた・民謡、祭祀音楽等の民俗芸能)の研究

専任研究員

所長: 吉川周平(日本民俗音楽・舞踊学)

「神楽の総合的研究」

「盆踊りの総合的研究」

教授: 久保田敏子(日本音楽史学)

「邦楽の歴史的音源に関する研究」

「地歌・箏曲の作品研究」

教授: 後藤静夫(芸能史・文化史)

「人形浄瑠璃・文楽の実態研究」

「芸能の伝承研究」

助教授: 田井竜一(民族音楽学・日本音楽芸能論)

「山・鉾・屋台の囃子の比較研究」

「六斎念仏の研究」

助教授: 高橋美都(芸能史・日本音楽情報論)

「舞楽の比較研究」
 助教授：竹内有一（日本音楽史学）
 「音楽芸能資料の書誌的研究」
 「近世音楽の作品研究」

非常勤講師

特別研究員
 告井幸男「平安時代中・後期における楽の諸様相」
 廣井榮子「日本近代における娘義太夫についての言説研究 豊竹呂昇を中心に」
 三木俊治「日本伝統音楽研究センターにおける田辺コレクション楽器の研究」
 森田柗山「中尾都山の虚無僧修行と尺八古典本曲『紫鈴法』の研究」
 情報管理員
 東正子「ネットワーク管理とホームページ管理」

事務室

事務長：旭昭治 担当係長：青木静夫
 係員：才田典子

学芸員・研究補助員

学芸員：川和田晶子
 研究補助員：池内美絵、伊藤志野、光本健吾
プロジェクト研究・共同研究
 プロジェクト研究
 「民俗芸能における神楽の諸相」
 研究代表者：吉川周平
 プロジェクト研究員：植木行宣、梅野光興、片岡康子、門屋光昭、小島美子、星野紘、松永建、松原武実、三村泰臣、宮田繁幸、茂木栄、渡辺伸夫
 「教育現場における日本音楽」
 研究代表者：久保田敏子
 プロジェクト研究員：井口はる菜、伊野義博、加藤富美子、薦田治子、澤田篤子、田井竜一、竹内有一、月溪恒子、永原恵三、樋口昭、藤田隆則、水野信男、茂手木潔子
 共同研究
 「日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化」
 研究代表者：久保田敏子
 共同研究員：亀村正章、川向勝祥、黒河内茂、後藤静夫、田井竜一、竹内有一、中井猛、林喜代弘
 「祇園囃子の源流に関する研究」
 研究代表者：田井竜一
 共同研究員：入江宣子、岩井正浩、植木行宣、垣東敏博、永原恵三、西岡陽子、

樋口昭、福原敏男、増田雄、米田実
 「寺社の祭礼に関わる舞楽の伝承研究」
 研究代表者：高橋美都
 共同研究員：秋田真吾、伊野義博、小野真

委託研究

「歴史的演奏のデジタルアーカイブ」亀村正章
 「東明節に関する散逸資料調査」平岡久治

設立の経緯

平成3年6月 世界文化自由都市推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を訴える
 平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及
 平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される
 平成8年10月 京都市が伝統音楽調査会（会長：廣瀬量平名誉教授）に、伝統音楽部門の調査を委託する
 平成8年12月 京都市の「もつと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる
 平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費 予算措置
 平成10年4月 施設建設費 予算措置
 平成10年10月 施設建設着工（工期17ヶ月）
 平成11年9月 日本伝統音楽研究センター設立準備室を設置する（室長：廣瀬量平名誉教授）
 平成12年2月 新研究棟竣工
 平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設
 平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟披露式挙行

施設

新研究棟6～8階
 6階 センター所長室、事務室、会議室、資料室、資料管理室、個人研究室
 7階 合同研究室(2)、楽器庫、貴重資料庫
 8階 個人研究室(5)、研究員室(2)、視聴覚編集室、研修室(2)
 （センター総面積約1,500m²）

Research Centre for Japanese Traditional Music Kyoto City University of Arts 2004

The Research Centre for Japanese Traditional Music was founded at the Kyoto City University of Arts on April 1, 2000, with the aim of undertaking comprehensive research on traditional music and performing arts within the society and culture of Japan.

In the more than one hundred years since the Meiji Restoration of 1868, Japan has followed a path of modernization and Westernization, which has become more pronounced in the fifty something years since the end of World War II. We have reached a time ripe for the reconsideration of Japan's traditional culture, and the development of new approaches to it. The founding of the Research Centre for Japanese Traditional Music at the Kyoto City University of Arts is of particular significance in view of the fact that Kyoto has long been the living centre of Japan's traditional culture.

Kyoto is rich in physical evidence of its traditional culture, what we may term a 'visual' heritage; with the establishment of this new body, however, the city authorities have demonstrated a deep respect towards its 'aural' heritage. As a new 'centre' for research on Japan's traditional music, the Research Centre aims to make a broad and significant contribution to the field of Japanese music, by means of sharing and exchanging information and the results of research with researchers, other research establishments and performers, not only within Japan but throughout the world.

The Research Centre for Japanese Traditional Music thus hopes to link the past with the present through a unique range of activities in research and creation, within the wider context of Japan's traditional culture.

Activities of the Research Centre

A. Collecting, ordering, and preserving research materials of relevance to the study of Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Documentary materials (books, periodicals, old documentary sources, copied and non-printed materials including microfilm, etc.)
- (2) Audio-visual materials
- (3) Instruments and related materials
- (4) Pictorial materials
- (5) Materials in electronic form, such as existing databases and the like

B. Individual research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Research by individual members of the full-time staff
- (2) Research on particular themes by scholars employed as part-time research fellows
- (3) Research commissioned from scholars outside of the Research Centre on their fields of speciality

C. Team research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Team research undertaken from an interdisciplinary and international perspective by research teams based at the Research Centre, formed for that purpose with the cooperation and participation of researchers and performers from both Japan and overseas
- (2) Surveys in collaboration with other bodies and/or individuals

D. Bringing the results of research to a wider audience through the following activities:

- (1) Public events including lecture series, seminars, workshops, and lecture-demonstrations
- (2) Publications including a regular newsletter, an annual bulletin, and collections of research materials
- (3) Electronic publications such as databases available for use online

Fields of Research

The research fields of the Research Centre encompass the past, present and future of Japan's traditional music:

- (1) The development and transmission of music prior to the Meiji Restoration of 1868

Prehistoric times

Religious song and performing arts (including archaeological study of surviving examples of instruments, etc.)

Ancient times

Buddhist music (*shoomyoo*, etc.)

Ceremonial and entertainment music of the court (*gagaku*, etc.)

Medieval times

Buddhist performing arts (*biwa*-accompanied narrative, *zoogei*, *shakuhachi*, etc.)

Performing arts of the warrior class (*noo*, *kyoogen*, etc.)

Popular song (*imayoo*, medieval *kouta*, etc.)

Pre-modern times

Music from foreign sources (so-called 'Christian' music, Chinese *qin* music in Japan, *minshingaku*)

Theatrical music (*gidayuu-bushi*, other types of *jooruri* including *tokiwazu-bushi*, etc., *nagauta*, *hayashi* music in *kabuki*, etc.)

Non-theatrical music (*jiuta sookyoku*, other *shamisen* genres, *biwa*-accompanied vocal genres, *shakuhachi*, etc.)

Popular song (*kouta*, *hauta*, etc.)

- (2) Developments in traditional music since the Meiji Restoration

The development of traditional music and its possibilities, including composition

The reception of traditional music and the place of traditional music in education

- (3) Music in daily life, in the broadest terms

Folk transmission and the music and performing arts of areas related to Japan and of its indigenous minorities

Music and the performing arts in daily life (children's song and folk song; folk performing arts including festival music)

Full-Time Research Staff

(Position, research fields and current research topics)

KIKKAWA Shuuhei (Director; Japanese folk music and dance) Comprehensive research on *kagura*; Comprehensive research on *bon-odori*

GOTOO Shizuo (Professor; Performing arts history, Cultural history) Research on the present status of *ningyoo-joyooruri*, *bunraku*; Research on the transmission of the traditional performing arts

KUBOTA Satoko (Professor; Historiography of Japanese music) Research on historic recordings of traditional Japanese music; Research on works of the *jiuta* and *sookyoku* repertoires

TAI Ryuuichi (Associate professor; Ethnomusicology, Japanese performing arts) Comparative research on the *hayashi* music of festival floats; Research on *rokusai-nenbutsu* music

TAKAHASHI Mito (Associate professor; History of the performing arts, Japanese music and information technology) Comparative research on central and peripheral *bugaku* dance traditions

TAKEUCHI Yuuichi (Associate professor; Historiography of Japanese music) Bibliographic research on documentary sources of Japanese music; Research on early modern Japanese music

Research Fellows

HIROI Eiko: Research on oral accounts of *musume-gidayuu* performers from the modern era

MIKI Shunji: Research on the Centre's TANABE Hisao collection of musical instruments

MORITA Shuuzan: Research on NAKAO Tozan as a trainee monk and the *shakuhachi-honkyoku* composition, *Murasaki reihoo*

TSUGEI Yukio: Aspects of mid- to late *heian* period (10th-13th centuries) court music

System Administrator

MASAKO Higashi: Maintenance of the Centre's network and homepage

Curator and Research Assistants

Curator: KAWAWADA Akiko

Research Assistants: IKEUCHI Yoshie, ITOO Shino, MITSUMOTO Kengo

Other members: AKITA Shingo, INO Yoshihiro, ONO Makoto

Administrative Secretariat

Director: ASAHI Shooji

Chief: AOKI Shizuo

Clerical Staff: SAIDA Noriko

Team Research

Major Projects

Aspects of folk *kagura*

Project leader: KIKKAWA Shuuhei

Other members: HOSHINO Hiroshi, KADOYA Mitsuaki, KATAOKA Yasuko, KOJIMA Tomiko, MATSUBARA Takemi, MATSUNAGA Ken, MIMURA Yasuomi, MIYATA Shigeyuki, MOGI Sakae, UEKI Yukinobu, UMENO Mitsuoki, WATANABE Nobuo

The traditional music of Japan in the classroom

Project leader: KUBOTA Satoko

Other members: FUJITA Takanori, HIGUCHI Akira, IGUCHI Haruna, INO Yoshihiro, KATOO Tomiko, KOMODA Haruko, MIZUNO Nobuo, MOTEGI Kiyoko, NAGAHARA Keizoo, SAWADA Atsuko, TAI Ryuichi, TAKEUCHI Yuuichi, TSUKITANI Tsuneko

Regular Projects

Research/compilation of historic recordings of Japanese traditional music

Project leader: KUBOTA Satoko

Other members: GOTOO Shizuo, HAYASHI Kiyohiro, KAMENURA Masaaki, KAWAMUKAI Katsuyoshi, KUROKOOCHI Sigeru, NAKAI Takeshi, TAI Ryuichi, TAKEUCHI Yuuichi

Research on the origins of *Gion-bayashi*

Project leader: TAI Ryuichi

Other members: FUKUHARA Toshio, HIGUCHI Akira, IRIE Nobuko, IWAI Masahiro, KAKITOO Toshihiro, MASUDA Takeshi, NAGAHARA Keizoo, NISHIOKA Yooko, UEKI Yukinobu, YONEDA Minoru

Comparative research on *bugaku* dance traditions in ritual performance

Project leader: TAKAHASHI Mito

Commissioned Research

Missing historical materials on the *shamisen*-accompanied vocal genre *toomei-bushi*:

HIRAOKA Hisaharu

Digital archive for historic recordings of musical performance: KAMEMURA Masaaki

History

1991 The need for a new Kyoto centre for research on Japan's traditional music expressed by HIROSE Ryohei at a planning committee for the development of Kyoto as a City Open to the Free Exchange of World Cultures

1993 Expansion of the Kyoto City University of Arts proposed within the New Master Plan of Kyoto City 1996 Founding of the centre for research on traditional music established within the Kyoto Action Plan for a town full of Vitality, based on the city's Development Plans for Arts and Culture

1997 Budget allocated for planning the new building and surveying the site

1998 Construction begun (completed early 2000)

2000 Commencement of activities (April); opening ceremony (December 2)

Facilities

The Research Centre for Japanese Traditional Music is situated on the 6th to 8th floors of the University's Shinkenkyuutoo (New Research Building), with a total area of approx. 1500m².

6th floor: Director's office, administration, committee meeting room, reference library, materials management room, individual office

7th floor: Seminar rooms (2), instrument storeroom, special collection

8th floor: Individual offices (5), fellows' rooms (2), audio-visual studio, training rooms (2)

編集後記

『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 所報』第6号をお届けします。当センターも本年度末で、満5年を迎えることができました。これもひとえに、皆様方の暖かいご支援の賜と、心から感謝申し上げます。

本年度にして漸く諸般のことが軌道に乗り始め、お陰様でこの「所報」も滞りなく年度末に発行できることになりました。

本号には、創刊号以来の企画であります「所長対談」として、本年度からお迎えした中西進学長との対談を掲載しております他、当センターの平成16年度の活動報告と、所員のエッセイ等を収載しております。

次号からは、年度末に一回の刊行を予定しております。少ないスタッフで編集をしておりますので、何かと遺漏もごさいますが、お気づきの点は、どうぞ御遠慮なくご指摘頂きたく、お願い申し上げます。

編集委員 久保田敏子
田井 竜一
竹内 有一

京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター 所報 第6号
2005年3月31日発行
編集・発行人 京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター
吉川 周平
〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6
電話 075-334-2240
FAX 075-334-2241
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>
印刷所 株式会社 田中プリント

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts
13-6 Ooe Kutsukake-choo, Nishikyoo-ku
Kyoto-shi, 610-1197, Japan
Tel +81-75-334-2240
Fax +81-75-334-2241
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

